

2021：変

——百周年の再起動 「紅羊劫」の前奏曲？（2）

夏

剛

3・4 大勢力, 「龍虎鬪」, 「9.10」決裂

賀龍は13歳時に7歳上の「童養媳」(成長後に息子の嫁にす当く、幼時に引き取られた女の子)徐月姑と成婚し、娘(金蓮、生年未詳、1920年代末?獄死)を儲けた。徐病没(1918.6、31歳)の翌年に一族が後裔持続の為に進めた再婚も、後妻向元姑(土家族、生年未詳)は29年に歿した。一方、賀は胡琴仙(1928年に知り合った芸人、生歿年未詳、建国後まで存命)を妾に納めた。

次の妻との間に娘が授かった(紅紅、戦争時代に窮死、生歿年未詳)が、蹇前任は性格の不一致で1938年にソ連へ赴き、延安帰りの後に離婚した。陳正人(1907.12.12~72.4.6、西北局組織部長、後に国家建工相・農業機械[→第8機械工業]相)の橋渡りで、賀は薛明(20歳年下の延安県委組織部長)と懇ろに成り、自ら指揮した南昌蜂起の15周年時(42.8.1)に結婚した。

両者の再/初婚は年齢差が4年前の毛沢東・江青の再婚と同じで、時期が同年「7.1」(建党21周年記念日)の林彪・葉群の再/初婚(10歳差)と、「12.12」の張宗遜・杜芳(生年等未詳、薛より2年遅く1938年入党)の初婚の間に在る。薛は葉の天津38女子(初・高等)中学の学友と一緒に延安に来た(1938)が、整風で葉の歴史の暗部を衝き林の賀への怨恨を招いた。

元帥の序列は、朱徳(8路軍→解放軍総司令)・彭徳懷(同副総司令・1野司令兼政委)・林彪(4野司令)・劉伯承(2野司令)・賀龍(紅2方面軍総指揮→西北兵团司令)・陳毅(新4軍軍長→3野司令兼政委)・羅榮桓(4野政委→総政主任)・徐向前(4方面軍総指揮→総参謀長)・聶榮臻(華北軍区司令→総長代理)・葉劍英(8路軍・軍委総長→武装力量監察部長)の様に、^{キャリア}職歴等の均衡の妙が有る。

朱は授与の翌年に党内序列が前期中央の3位から1位下がり、彭は前年に初代国防相と成り、林は志願軍司令固辞の失点と病弱で後退の観が有ったが、第8期初代政治局委員17人中7元帥の順位は朱・林・羅・陳・彭・劉・賀(4・7・11~12・14~16)である。林の常委・副主席昇格と直後・翌年の劉・彭失脚で、新設の中央軍委副主席に林・賀・聶が就任した。

羅榮桓は林の筆頭副主席就任に就いて、病氣と団結力の欠如を理由に毛に異論を唱えた。毛は元帥中唯一の政治工作畑の彼を厚く信頼したが、党・軍の序列と逆の配置は考え難い。声望が高く自分への忠誠を能く表す林と比べて、戦功が劣り不羈な賀は使い難い節が有る。毛は国防工業に専念する聶を3位に置き、実務を司る秘書長に腹心の羅瑞卿を起用した。

賀が軍の最高指導部に入った時点、名の字・形通りの「龍虎鬪」（龍虎相搏つ）が始まった。「彪」（小さい虎。虎の皮の斑）の威光が強い林は、体力不足で元部下の羅の仕切りに頼った。羅は毛から関連部署の要職が多く与えられ、実権の乏しい元帥陣と必然的に摩擦が起きた。彼は林の命が長くないと踏んで賀に接近し、古巣への不義理として各方面で鬻ぎを買った。

両「高危」職の総参謀長兼軍委秘書長は史上2人のみで、黄克誠に続いて羅も解任された。林派の周到な攻撃で蚊帳の外の賀龍は勢力を削がれ、孤立無援の羅は惨めに転落した。梁必業（総政副主任，中將，1916.3.7～2002.10.14）の告発文を見せられた翌日、自決の拳に出た。逆様でない直立の儘の飛び降りて命拾いした事は、劉少奇・鄧小平・葉劍英等に嘲笑われた。

羅の自殺は魯迅が言った民国史上最も暗黒な1日の丸40年後に当たるが、学生・市民47人を射殺した北洋軍閥の「3.18」凶行と比べれば、毛治下の暗黒史の中では取るに足りない。羅失脚の翌月（1966.1.8）軍委副主席が増員し（陳・劉・徐・葉）、葉が秘書長を兼ねた（5.23）。賀は3人中2位から7人中の1人に稀釈され、末席の葉の急上昇と逆に急降下へ転じた。

羅下ろしは林の委託で葉群が毛に告発した（1965.12.1. 58歳の誕生日）事で本格的に始動し、葉劍英・謝富治・蕭華・楊成武・劉志堅（総政副主任，中將，1912.1.23～2006.3.11）も付和した。毛は彼等が指摘した野心等に反応し8日に政治局常委擴大會議を招集したが、7年前に元帥失脚第1号と成った劉まで事前に内実を知ったのに、賀は戦備が主題だと思い込んでいた。

朱徳は彭徳懐の失脚時の軍委擴大會議（1959.8.18～9.12）で、林・劉亜楼（空軍司令，空軍上將，10.4.8～65.5.7）等の攻撃に遭った。「彭羅陸楊」批判に消極的な所為で、4人解任の日（1966.5.23）に劉少奇主宰の會議で強烈に叩かれた。林・周恩来・陳毅・薄一波・烏蘭夫等の糾弾に対して、弁解しつつも自己批判せざるを得ず、遂に3人目の元帥失墜が確定した。

葉群が毛に羅の罪を訴えた日に79歳と成った朱は、権勢・野心も胆力・気力も無いのに、陳から皇帝即位の野望や政変の企図を疑われ、周から常委中の時限爆弾で信用できないと言われた。毛は支持獲得と異端排除の為に朱に止めを刺したが、保身の為の追随者は張鼎丞（最高人民檢察院檢察長，1898.12～1981.12.16）も含めて、8月の烏蘭夫を始め次々と失脚した。

「文革」発動の前日（1966.5.15）、周・葉は毛の首都防衛強化の意に沿って「首都工作組」の設置を提案した。周が掌握する政変防止機構（長＝葉劍英）の建議と毛の許可（「紅衛兵」成立の5.29）で、首都警衛師の4倍増（1～4師）と成った。集結異動開始（『人民日報』「妖怪変化一掃」社説の6.1）の翌々日、衛戍区拡充・改編を発表する會議で賀は失意の様子を見せた。

元帥3位の林は党・軍委副主席就任後2・4・1位に引導を渡し、毛の後継者と成った途

端に上位残留者の5位に引鉄^{ひきがね}を引いた。9月10日に人民大会堂で来訪の賀との最後の正式面談で、貴方の問題の軽重は誰を支持し誰に反対するかに懸る、と言って暗に恭順を求めた。賀は中央・主席に反対する人に反対し、逆の場合は支持すると答え、話し合いが決裂した。

9596日の最長宰相、「6.9」迫害死、禍福変転

両元帥対決の日が「冥寿」（故人の誕生日）古稀に当る葉挺は、解放軍軍事家の序列が元帥陣に次ぐ位置が示す通り、後9年半生きていれば元帥授与が確実視される。彼が存命なら新4軍系の元帥は2人に成ろうと葉剣英が陳毅に言うと、否、葉姓の元帥が1人増えるのだと陳は当意即妙に応えたが、「鉄軍」軍長も対象なら10元帥の構成は変わったに違いない。

「4.8空難」死者中の秦邦憲は党首時代、共産国際派遣の軍事顧問ブラウン（独逸人、漢名李徳、1900.9.28～74.8.15）の誤った指揮に由る甚大な損害の責任が重く、第7期中央で辛うじて末席を汚し屈辱の余り自殺を考えた。鄧発（中央職工運動委員会書記、1906.3.7生）は「国家」政治保衛局局長（1931～34）として大量の肅清・殺戮^{りく}を進め、故に第7期中央で落選した。

周恩来は航空機遭難・全員絶命の悲報を聞いて、持ち前の自制力を失って所構わず慟哭した。不人気の秦・鄧より親しい葉・王若飛（前中央秘書長、1896.10.11生）の不幸を悼み、王（在仏勤工儉学〔苦学〕の仲間）は建国まで生きれば常務副総理として支えて貰えるのにと悔やんだ。国共合作中に建国を目指すのは中共の野望で、総理は己しか居ないと言う自負は理に適う。

周は青写真通り開国総理と成り、在任（9596日）が史上全ての宰相より長い。毛は不満や嫉妬を覚えつつ頼らざるを得ないが、柯慶施や王任重も総理の才が有るとした。左傾党高官を好む毛の圧迫で彼は進退伺いを出したが、丸11年後の賀龍の迫害死は無関係の様でありながら、隔離先へ送る際の秋に迎えに行く約束の食言は、不倒翁の秘密の一端を窺わせる。

歿5周年時の遺骨安置儀式で彼は未亡人に、賀を守れなかった事を深く詫び、全員を率いて遺影に御辞儀をする時9回もし、通例の3倍に当る礼遇で良心の呵責^{かしゃく}に応えた。尤も、内戦中に国民党へ帰順の意を表した裏切り（無実）が特別審査で断定され、粟裕・彭徳懐と同じ「里通外国」（秘かに外国と通じる）の容疑も有った以上、救おうとしても成す術が無い。

建国後の軍上位者集団失脚の第1・2陣（1958.7. 59.9）の元帥+大将は、総参謀長2人（粟・黄克誠）・国防相1人（彭）を含む。中ソ決裂（1959.6.20）前後の連鎖的な肅清の外発的な動因には、ソ連の総参謀長（上級大将時代の41.1～7.29）経験者・国防相（フルシチョフ時代の2代目、55.2.9就任）ジューコフ元帥（史上9人目、43.1.18授与）の政変関与・解任劇（57.6. 10）が有る。

彼は独ソ戦争（1941.6.22～45.5.8）中、方面軍総司令としてスターリングラード（61年よりボルゴグラード）攻防戦（42.6.28～43.2.2）・レニングラード（91年より67年前の旧称サンクトペテルブルク）包囲突破作戦（41.9.8～44.1.27）・柏林^{ベルリン}攻略戦（45.4.23～5.2）を指揮し、最高総司令

官(スターリン)代理も務めたが、地上軍総司令就任直後オデッサ軍管区司令に左遷された(46)。

彼は暴君急死の日に国防次官に返り咲きし、113日後(1953.6.26)にマレンコフ(第2代閣僚会議議長, 02.1.13~88.1.14)等の命で、ベリヤ(同第1副議長兼内務相, 1899.3.29~53.12.23)の電撃逮捕を仕切った。長年の秘密警察の頭領の追放(後処刑)は生涯最も大変な仕事であったが、4年後の内訌で彼は逆にスターリンの後継者及び一味の追い落としに手を貸した。

マレンコフ・モロトフ(前外相, 閣僚会議第1副議長, 1890.3.9~1986.11.8)等は57年6月18日、ソ連最高会議幹部会緊急会議でフルシチョフ(ソ共中央書記局の実質的指導者)解任の動議を出した。奇襲に遭った当人は賛成7・反対4の可決に不服を表し、ジューコフ(委員候補)の共闘と軍用機派遣に由る中央総会の開催で、逆に中央委員会の多数で政敵を撃退した。

その逆転の中共への影響は19年後の宮廷政変に及び、華国鋒等が超法規的な「4人組」逮捕に踏み切ったのは、中央全会(党大会の合間の最高意思決定機関)で多数が取れない懸念に由る。毛沢東は1970年廬山会議で中央委員会成員の集団反乱の恐しさを初めて実感したが、当初は恐らく国防相の絶大の権勢に警戒を覚え、後に彭・林彪の失脚の伏線と成った事か。

フルシチョフは「モロトフ反党集団」を中央・幹部会から追放し、逆転勝ちの立役者ジューコフを論功行賞で幹部会成員に昇格させた。軍総帥の権勢拡大は両刃の剣で脅威と化した為、新首領は当人の外遊帰来後の幹部会(10.26)で個人崇拜・権力濫用・冒険主義等を糾し、国防相解任と中央・幹部会除籍の決議を通し、且つ中央総会(28~29)の承認を得た。

ジューコフは当局の抑制で史書から功績を抹消され、国家保安委員会の監視下で年金生活を送った。フルシチョフは党首兼首相と成り自ら批判したスターリンの集権を実践したが、政争の連鎖で7年後に同月の臨時中央総会(10.13~14)で辞任に追い込まれた。ジューコフは大祖国戦争勝利20周年式典(5.8)への出席で復活し、回想録も公刊できた(1969.4)。

ジューコフの人生(1896.12.1~1974.6.18)の起点は朱徳の恰度10年後に当り、漢訳名「朱可夫」も中国の元帥首位の姓を含む。「狡兔死、良狗烹。高鳥尽、良弓藏。敵国破、謀臣亡」(狡兔死して、走狗烹らる。高鳥尽きて、良弓藏される。敵国破れて、謀臣亡ぶ)という中国古来の警句(『史記・淮陰候伝』)は、2人に限らず両国の一部の将領や政界要人等にも当て嵌る。

朱・彭徳懷・賀龍の姓+「老総」(古参総帥)の尊称と比べて、「老」抜き「林総」は職歴・長幼の序に合致する。将帥中最年長(授与時68歳)の朱は紅軍・8路軍・解放軍総司令を歴任した(1930~54)が、陳毅と共に軍を率いて井岡山根拠地(江西・湖南の境)の毛沢東と合流した史実(28.4)は、「文革」中の改竄で21歳年少の部下林彪(当時中隊長)の功績とされた。

8路軍・解放軍副総司令の彭は9歳若く元帥序列1位低い林と比べて、軍団長就任(第3, 1930.6)が早く(第1, 32.3), 政治局入りも11年余り先行した。初代志願軍司令兼政委として出征した朝鮮戦争の停戦後に初代国防相と成ったが、林特進(党副主席)の直後の粟裕・劉伯承解任を主導した翌年に林に取って代えられたのも、敵国・敵手撃破の儘有る落ちである。

賀は紅軍3大主力中1・4に次ぐ2方面軍の総指揮、8路軍3師団中120師師長を務めたが、115・129師師長の林・劉伯承が後に彭・陳毅（新4軍軍長）と共に野戦軍司令を成す時期に、陝甘寧晋綏（綏遠省、現内蒙古中部）の後方防衛を担った。実力本位の配置は非中央紅軍系の弱体化にも繋がり、賀の「老（先輩）・総（統領）」の重みは抗日戦争後に減らされた。

初代中央西南局（1949.7.16～54.12）の第1～3書記（鄧小平・劉・賀）は、建国3年後に其々常務副総理・南京軍事学院院長兼政委・国家体委主任に異動し、8路軍主力の2/3と2野の長は軍の実権を完全に取られた。賀は7年後の彭失脚で軍委副主席に起用され、病弱の林より日常的運営や渉外活動を多く分担したが、^{あざな}糾える繩の如き禍福の変転で吉が凶に出た。

「11.7」尊崇, 「4.22」記念, 「7.23」幕開け

彭は国防相再任（1959.4.27）の3日前から軍事友好代表団を率いて、9カ国（^{ポーランド}波蘭・東独・チェコ＝スロバキア・^{ハンガリー}洪牙利・^{ルーマニア}羅馬尼亞・^{ブルガリア}勃牙利・^{アルバニア}阿爾巴尼亞・ソ連・^{モンゴル}蒙古）を歴訪した。地拉那でフルシチョフと邂逅し挨拶した事（5.29～30）が、帰京（6.13）の31日後に毛沢東へ失政を直諫した事と直結されて、ソ連の影響で毛の権威に挑む挙動とする牽強附会の罪名が生じた。

「老大哥」（兄貴）^{づら}面をするソ連に反撥した彼は左様な訳が無く、東欧で憂国の情が湧いた契機は中国に勝る豊かさである。彼は廬山へ赴く汽車で賀龍に腹を割って、我々の労働者・農民がお人好しでなかったら、矢張り洪牙利事件が起り、ソ連軍に来て貰わないと行けないかも知れんと語った。真剣な懸念も罪状に数えられ、会議で告発した賀の得点にも成った。

中澤克二は習近平党首再任日を100年前の露西亞革命のユリウス暦（10.25）に重ねたが、自国の歴史記述も脱旧暦の中国では、10月革命記念日を西暦で覚えるのが常識である。「中華蘇維埃共和国」・紅色中華通訊社（新華社 [1937.1.29 発足] の前身）・紅4方面軍の成立（31.11.7）等の様に、中共は早期からこの日を尊び、中ソ対立の前に建党/軍節に準ずる程であった。

「10.25」は志願軍入朝参戦（1950）記念日の他、2年後の「3反」「5反」（贈賄・脱税・国家資材の窃取・手間抜きと材料の誤魔化し・国家の経済情報の窃取に反対する）運動終結日でもある。毛沢東が清華大学「百日戦争」に終止符を打つ当く宣伝隊を進駐させた日（1968.7.27）も、「血盟」を結んだ両専制国家の深い縁が現れる様に、因らずも朝鮮休戦の丸15年後に当る。

ジューコフ国防相解任は60年後の前日の習党首統投開始と関係が無いが、翌/翌々年の粟裕・劉伯承・彭德懷・黄克誠失脚の誘因と成る。劉少奇は彭を魏延（三国時代の蜀漢の武将、？～234）の反骨、ジューコフの党に対する意識、馮玉祥（軍閥出身の国民革命軍1級上將、1882.11.6～1948.9.1）の偽善の持主とし、軍事政変の企図を質した（政治局常委会議、59.7.30、8.1）。

建国当初の対ソ一辺倒はソ共「20大」（1956.2.14～25）のスターリン批判から亀裂が現れ、ミコヤン（閣僚会議第1副議長、1895.11.25～1978.10.21）が中共「8大」で祝辞を述べる日（56.9.17）、

初対面（49.1.31, 西柏坡）から幾度も彼の先輩・父親気取りに不快だった毛は故意に欠席し、その抗議の意図を翌々年にユージン（駐中国大使, 1899.9.7~1968.4.10）に明かした（7.22）。

毛は前夜10時~未明1時50分の会見で、フルシチョフの連合潜水艦隊設立の提案に驚き、当日11時半~午後4時半の会見で拒否し、ソ連の傲慢に憤慨し自国の主権を主張した。画期的な「不」^{No}は拒絶→断絶の発端に成り、翌年ソ連は国防新技術協定（1957.10.15締結）を破棄し（6.20）、フルシチョフの訪中（9.30~10.4）も物別れに為り共同声明さえ出なかった。

最初の憤怒の一蹴は、軍委拡大会議で劉伯承・粟裕が自己批判を行った11・7日後に当り、ソ連留学歴の有る劉、同じソ連式の軍隊正規化を目指す粟の解任は、毛の脱ソ連志向にも沿う。ソ連が原爆見本提供の約束を反故にしたのは、彭徳懐のソ連と諸衛星国訪問の直後の事で、両国の対立も翌月の彭と張聞天の「大躍進」批判に対する毛の不寛容の背景に有る。

彭の意見書は毛が政治局拡大会議（7.2~8.1）で配布させ（7.16）、討論で黄克誠・周小舟が支持し（19）、張聞天が3時間の発言で失政を究明した（21）。前党首・初代駐ソ大使の張もソ連留学組で、筆頭外務次官と国防相・総参謀長の連携は、12年後の廬山会議の林彪・陳伯達結託と同様、「軍事倶楽部」^{クラブ} + 理論家の異端勢力に対する毛の警戒に引っ掛った。

毛は張の系統的な論証に苛立ち、「隊伍散了」（集団解散）の危機を煽る柯慶施の進言も有って、23日に全員を集めて怒気の熱弁で異論を撃沈した。前年の前日の軍委拡大会議閉幕（劉・粟解任決議）・ソ中連合艦隊設立の拒否に続いて、歴史は又大暑（7.22/23）辺りで激動した。建党大会開幕38周年時の毛の彭「砲撃」は、「一尊」独裁の絶対化を導く転換点と成った。

毛はレーニン（ソ連の「建国/邦の父」, 1870.4.22~1924.1.21）生誕90周年記念の名目で、『レーニン主義万歳』（『紅旗』編集部, 同誌4.22）・『偉大なレーニンの道に沿って前進せよ』（『人民日報』編集部, 同紙, 同日）・『レーニン主義の旗幟の下で団結せよ』（22日の記念大会に於ける陸定一の演説, 同, 翌日）を発表させ、中ソ対立の表面化も辞さぬ自主路線の堅持を顕示した。

意識形態面の3矢連射に対してソ連は経済・建設領域で一矢に報い、中国に派遣した技術専門家の引き揚げを通告した（7.16）。一方的な日程予告・実施（同25, 28~9.1）は、2年前の毛の「7.22」^{ゼロ}零回答への意趣返し之感も有る。未完の援助項目が多い中で秦城監獄の工事は直前に終り、半ば置き土産の牢屋は恐怖統治と決別したソ連以上の効用を発揮した。

官製『毛沢東伝（1949—1976）』の43章中の第31章『中ソ論戦』は、次の『社会主義教育運動（上・下）』『文化大革命』発動の前奏曲と成る。その後の両党・国関係の緊張緩和も東の間で、1961年の中印国境戦闘（10.20~29）の第1段階で中国進撃、印度敗退、^{キューバ}攻馬危機（同月22日の米国の海上封鎖宣言後、28日にソ連が誘導弾撤去の発表で妥結）の後に再び悪化した。

保加利亚共産党「8大」（11.5~14）の4日目、中共代表伍修権（中央対外連絡部副部長, 1908.3.6~97.11.9）は演説で、^{アルバニア}兄弟党に対する兄弟党の拙劣な非難を利敵行為と断じた。最終会議の総括でジフコフ書記長（1911.9.7~98.8.5）は名指しを避けつつ、阿党の汚い虚偽・

中傷と共産主義運動からの逸脱を糾す形で反論し、共産圏内の反中合唱の第1声を上げた。

伊太利共産党「4大」（12.2～8）の初日、トリアッチ書記長（1893.3.26～1964.8.21）は中共の「戦争不可避」論等を誹った。独逸統一社会党「6大」（1963.1.15～21）の2日目、ソ連のフ党首も初めて中国を名指して批判した。中共は立て続けに反駁し（『人民日報』社説6篇、『紅旗』編集部論説1篇、12.15～翌年3.8）、同時にソ連を名指しせず関係改善の余地を残した。

「声明戦」が止まない中の両党会談（モスクワ、7.6～20）は平行線の儘に終わったが、ソ共代表団団長スースロフ（第2「イデオロギー」書記、1902.11.21～82.1.25）等と対峙した鄧小平団長一行（副団長＝彭真、成員＝康生・楊尚昆・劉寧一〔07.12～94.2.15〕・伍修権・潘自力〔駐ソ大使、04.5.1～72.5.22〕）は、21日に北京空港で毛・劉少奇・周恩来・朱徳等と大衆5千人の歓迎を受けた。

国際共産主義運動の総路線を提起するソ共中央の書簡（3.30）に対し、中共中央は返信で独自の建議を開陳した（6.14）。ソ共中央は全党への公開書簡（7.14）で辯難し、中共は9篇の評論（『人民日報』『紅旗』編集部、9.6～翌年7.14）で批判した。快挙の「9評」は毛が7月23日の会議で書記処に与えた任務であるが、「1大」開幕日は42年後も党史の節目に成った。

「両弾一星」「1059」「東風压倒西風」

「8評」（『無産階級革命とフルシチョフ修正主義』、3.31）で初めて名指して相手を修正主義者と叩いた後、決裂回避の為フルシチョフの古稀（4.17）に毛・劉・周の祝電が発表された。その前後「書簡戦」が繰り返された（ソ共1963.11.29書簡→中共64.2.29返信→ソ3.7→中5.7→ソ6.15→中7.31、別往復のソ7.30→中8.30）が、準備中の「10評」はソ連の政変で不要に成った。

フルシチョフ失脚の結果、ブレジネフ（1906.12.19～82.11.10）が党中央第2→第1書記に、コスイギン（04.2.21～80.12.18）が閣僚会議第1副議長→議長に昇格した。中国側は当日（10.14）の夜にソ連大使チェルボネンコ（1915.9.15～2003.7.11）から通報され、指導部は公表日（16）の党首・首相宛の祝電（毛・劉・朱徳・周名義）を始め、新体制への期待を以て接近を試みた。

長征開始30周年の前日に当たる「10.16」は、重慶（地名）の含意の様に慶事が重なった。原爆初実験成功の朗報は周恩来が当夜に逸早く、人民大会堂で大型音楽舞踏史詩（史劇）『東方紅』（東の方があか紅くなり）を觀賞した後、3千人の出演者に誇らしく披露した。万雷の拍手と床が抜けそうな欣喜じやく雀躍が現す通り、毛沢東時代の最たる全民痛快の1日と言える。

毛は中国の核兵器開発の出発点（核工業の発展を研究する書記処拡大会議、1955.1.15）で、ソ連の援助と我々の人員・資源が有るから如何なる奇跡も作れると断言した。原子爆弾・水素爆弾・大陸間弾道誘導弾（の開発・製造）やを行なう事は、10年の努力が有れば出来る、と「大躍進」発動の29日後（1958.6.21）に自信を示したが、翌年の前日にソ連から梯子を外された。

自力更生の原爆第1号「596」の命名は、臥薪嘗胆の意気込みで協定破棄の年・月に因ん

だ。米 (1945.7.16)・ソ (49.8.29)・英 (52.10.3)・仏 (60.2.13) に次ぐ初実験成功は、7年後の同月に中共政権が勝ち取った国連安全保障理事会常任理事国 (国連創設 [1945.10.24] 時の第2次世界大戦戦勝組の上記5政治大国) の地位に相応しい。

水爆の初実験成功は米 (1952.11.1)・ソ (53.8.12)・英 (57.5.15) に遅行したが、仏 (68.8.24) の先を越し (67.6.17)、2種類の成功の間隔 (2年8ヵ月) が最短記録 (ソ連の3年11ヵ月) を塗り替えた。核弾頭搭載の短距離 (射程 800^{キロ}) 地对地誘導弾「東風-2」の初実験成功 (1966.10.27) も、列強と競う核/尖端兵器開発の勝利として朝野を鼓舞した。

「両弾」は当初の原子爆弾+誘導弾から核 (原子・水素) 爆弾+大陸間弾頭誘導弾に進化したが、草創期の誘導弾は聶榮臻訪ソ (1957.9) 時に得た合意でソ連が複製を援助した物である。国防部第5研究院 (1956.10.8 設立) は建国10周年前の成功を祈る暗号名「1059」を付けたが、節目の祝日 (59.10.1) の102日前のソ連の背信宣言で頓挫の危機に瀕した。

1958年4月に始まった開発は供与停止の材料・部品の国産化で模倣品 (地对地) が出来た後、第1号 (射程 550^{キロ}) の実験成功 (1960.11.5) に漕ぎ着けた。功労者の謝光選 (戦略誘導弾・衛星搭載ロケット専門家) が38歳と成った当日は、現場に居た聶帥の賛辞の通り中共軍装備史上の「里程碑」 (道程碑) と転換点で、同じ算用数字が並ぶ5年前の「1.15」と連環を成す。

同年「7.1」 (建党39周年記念日) に入党した謝光選 (第1総体設計部総合実験室主任) は、後に航天工業部 (国防部5院より改組した第7機械工業部 [1965~82] の後継組織 [~88]) 総技師を務めた。生年月日 (1922.11.5) と逝去の日・時刻 (2016.2.22, 22:10) の8個の2と4個の1, 1個の9は、従事した「両弾一星 (人工衛星)」や「1059」発射時 (9時2分28秒) と重なる。

援助要請の為の聶 (副総理兼国防部航空工業委員会 [1956.4.13 設立] 主任) 訪ソの前/翌月に、ソ連は世界初の大陸間弾道誘導弾 (射程 6千^{キロ}) 発射 (57.8.21)・人工衛星発射 (10.4) を遂げた。続く世界初の宇宙有人飛行 (1961.4.12)・月探査機月面着陸 (66.2.3)・宇宙^{ステーション} 拠点 運行 (71.4.19~25)・火星着陸 (71.12.2) 等も、西側超大国と伯仲する軍備・宇宙開発競争の威勢を現した。

米国初の人工衛星発射 (1958.1.31) 後、毛は年末の8期6中全会 (11.28~12.10) で、我々も人工衛星を作る、^{しか} 而も大きい物だと^{うそぶ} 嘯いた。英 (1962.4.26)・加^{カナダ} 奈^ダ 陀 (同 9.29)・伊 (64.12.15)・仏 (65.11.26)・濠^{オーストラリア} 太^{リア} 刺^{リア} 利 (67.11.29)・日本 (70.2.11) より遅い成功 (70.4.24) は、設計・製造・発射の純国産としてソ・米・仏・日に次ぎ、後出の1例 (71.10.28) しか無い英国を上回る。

史上初の^{ポスト} 大気圏外の有人飛行を成し遂げたソ連の宇宙船「東方1号」と、ソ連型・中国改良の「1059」誘導弾の初実験後の改称「東風-1」は、東側 (社会主義諸国。中国語=「東方」) 的な発想の同根性を窺わせる。「東風」は^{dongfeng} 拵音 (中国語の発音表記の^{ピンイン} 羅馬字、又その音) の略 (DF) が「東方」と通じ、毛沢東が社会主義の勢力に譬えた政治的な意味に先ず思い当る。

土着意識が強く海外体験への興味が乏しい毛は、2度だけ外国に行った (初回は1949年12月6日に列車で出発、9・16日ソ連領内入り・^{モスクワ} 莫斯科到着、50年2月17日 [友好同盟互助条約調印の3日後]

帰国の途に着き、26日国境近くの内蒙古満州里市に入る。次は57.11.2～21、空路）。官製伝記の建国後篇の第2・18章『第一／二次訪蘇』が、重要な外交活動と貴重な出国経歴の公式記録と成る。

2回目は10月革命40周年記念大会（前日の11.6）と、社会主義国家共産党・労働者党代表会議（14～16）と64ヵ国（+非公表の4ヵ国）共産党・労働者党代表会議（16～19）に参加する為である。その間、ゴムウカ（波蘭統一労働者党第1書記、1956.10～70.12在任、05.2.6～82.9.1）との懇談（6日）を始め、幾度も「東風压倒西風」（東風が西風を压倒する）の楽観論を鼓吹した。

17日にモスクワ大学で中国人留学生・研修生3500人を接見した時に、今年は世界の風向きが良からぬ去年から大いに好転し、東風は必ず西風（西側の勢力）を压倒すると断言した。翌日の会議でも中国の成語に由来した命題を繰り返し、同じく米国に未だ出来ない人工衛星の発射を論拠に挙げたが、「外層（宇宙）空間」制覇の先行は優位に直結された訳である。

『紅樓夢』（清の乾隆〔1736～95〕年間の長篇小説、前80回は曹雪芹〔滿族、15頃～63頃〕作、後40回は高鶚〔38頃～1815頃〕の続作）の第82回に、「凡そ家庭の事は、東風が西風を压倒するのだから、西風が東風を压倒するのだ」、という林黛玉（繊細・虚弱・孤高な美少女）の論評がある。この名著を好む毛は両雄並立せぬ原理の説明と、社会主義必勝の宣伝に借用・転用した。

「左派」幼稚病」「全民煉鋼」「政績」・“欺君”

波蘭等が内政干渉癖の強いソ連を社会主義陣営の頭として認めたくない中で、毛は到着時の談話でソ連が首と為る社会主義陣営は世界平和を保障する堅固な砦だとし、10月革命が人類歴史の新紀元を創始した以来、ソ連は建設で輝かしい成果を上げ、多くの領域で世界の最前列に立ち、初の人工衛星発射は人類が自然界を征服する新紀元の開始だと力説した。

彼は社会主義12ヵ国党代表会議の初日に専らソ連を首領と為す談義を展開し、中国は建設の経験が少ない経済小国で半個の衛星も打ち上げていないから、調整・互助・会議招集を仕切る陣営首領の資格が無いと語った。領袖・「領導人」は「領先」（首位・先頭に立つ。〔競技で〕優位に立つ）が必要で、実力を欠くと他者に言う事を聴いて貰えないという考えが窺える。

「反右闘争」で中共・毛の専制を磐石にした後の訪ソで痛感した彼我の国力・影響力の差は、人工衛星の発射が端的に示すソ連の「異常迅速」（11.2談話）の急成長への渴望を強めた。第2次国民経済発展5ヵ年計画と15年で英国に追い着き追い越す目標の初年（1958）に、毛は新年早々「不斷革命」の号令を發し、党の仕事の重点を技術革命に移すよう指示した。

政權奪取後の土地改革→農業合作化→私営工商業・手工業の社会主義改造に次ぐ革命として、社会主義3大改造の内の生産資料（手段）所有制の改造は1956年に基本的に完成し、昨年来の政治・思想分野の社会主義革命は今年7月1日まで基本的に一段落が着くから、経済の立ち遅れを解消する技術革命を起す番に成る、と彼は意気軒昂として発破を掛けた。

毛は革命を戦争と同一視し、勝利後に直ぐ新しい任務を提起しなければならず、其で幹部・大衆は常に革命の情熱を持って、傲慢に成る余裕も無いと言う。矢継ぎ早に繰り出した政治運動は建党37周年記念日前に一先ず区切りが付いたが、彭徳懐が批判した「小資産階級的熱狂」の所為で、理想・空想・妄想に反して疲憊→失敗→消沈→頹廢の悪循環に陥った。

「共産主義に於ける“左翼”小児病」(レーニンの著書[1920]題、漢訳『共産主義運動中の「左派」幼稚病』)は、毛沢東時代の27年弱の第1・2の1/3期に跨る1958年の中国の少壯の焦燥に現れた。建国と「文革」勃発の中間点(1958.1.22)に当る南寧会議閉幕の左旋回を受けて、『毛伝』で言う「国民経済新躍進の動員大会」(第1期全人代第5次総会)が開幕した。

9日後の「右派」閣僚2人解任・同全人代代表38名の資格剥奪は、民主党派・人士との提携が主従に変質した転換点である。「反右」は正式な終結(1958年6月末)を待たず、前年「6.8」発動後の「7.1」(同じ毛執筆の『人民日報』社説『文匯報の資産階級的方向は批判す当きだ』)で勝負が付いたので、外野の異論を封殺した彼は全力疾走で経済面の決勝に取り憑かれた。

毛提唱の6億人総製鋼鉄(「全民大煉鋼鉄」)運動は鉄屑ばかり作る稀代の杜撰・浪費の愚挙で、異常な生産高を捏造・宣揚する「放衛星」(衛星打ち上げ)はソ連の偉業の刺激を窺わせる。「畝産衛星」第1号(河南遂平県衛星農業社の小麦の畝[6.67^{アール}a = 667平米]当り生産量2105斤[1斤 = 0.5^{キログラム}])は、奇しくも「反右」社説第1弾の丸1年後(1958.6.8)の『人民日報』に載った。

記録競争は「天下第一田」(湖北麻城縣漢建園一社の早稲畝産36900斤、新華社8.13)等を経て、終盤の9月下旬に小麦8586斤(青海柴達木盆地賽什克農場第1生産隊)、稲130435斤(広西環江県紅旗人民公社)に達した。「6.8」社説で「右派」に「此は何故だ?!」(題)と詰問した毛は、農村の出身なのに何故有り得ない数値を信じたのかと田家英に質された程に不明である。

偽装産地の役人も欺瞞を知りつつ「政績」(政治実績)作りに走ったが、農業に疎い都会人はともかく人口の9割弱を占める農民の家庭に生れた高官等も、「大本營発表」への懐疑が憚れる故に目を瞑った。アンデルセン(デンマークの詩人・作家、1805.4.2~75.8.4)の童話『裸の王様』(37)の、大臣・家来・皇帝が揃って詐欺師に手玉に取られる滑稽な情景を連想させる。

裸の王様と化した晩年の毛も臣下の「欺君」(君主を欺く)に遭う事が有り、1971年1月に黄永勝総参謀長に張宗遜前副総長の現状を下問した時、黄は張が林彪派に迫害されている境遇を誤魔化して済南軍区副司令担当と即答した。「圓謊」(嘘の辻褄を合せる)の為に翌日に物心の準備が無い張を赴任させ、忖度・欺瞞の本能・芸当の機敏・熟練を現す好例と成る。

「在済南軍区当副司令」(済南軍区で副司令を担当)なら真っ赤な嘘に為るが、「任済南軍区副司令」(担当は済南軍区副司令)なら予定の意を含み檻縷を繕うまでも無い。黄は上級話術の方を使ったのか分らないが、毛の配慮を察し即応したのは流石である。任命権が総政治部に在る要職を咄嗟に弄れた事は、総参謀長の越権に対する毛の警戒の合理性を裏付ける。

漢訳『皇帝の新装』(原語と英・仏訳に同じで早期の和訳に通じる「皇帝の新衣裳」)の童話は、

原作がマヌエル（西班牙の王族・散文作家、^{エッセイスト}1282.5.5～1349.6.13）の『王と如何様機織師の出来事』である。刊行（寓話集『ルカノール伯爵』所収、1335）の502年後に翻案され、普遍的な原理を世界中の人々を教えて来たが、皇帝・35年は又『習近平帝国の暗号2035』を想起させる。

2035年までの現代化国家建設の基本的完成と言う「宏偉藍図」（雄大な青写真）が実現できても、「当代秦始皇」の評を憚らぬ毛の亡霊の徘徊が許される限り「皇帝的新装」が再演されよう。初の中国統一を遂げた秦の始皇帝（嬴政、前259～前210）の秦王即位（第31代、前247）は、台湾征服・中国統一を夢見る習の生誕の2200年前に当り妙な史縁を思わせる。

「独夫之心」「楚腰・“争寵”」「好大喜功」

秦の列国撲滅・始皇帝即位（前221）の2200年後に改革・開放の始動で新時代が訪れたが、始皇帝は大業完遂の翌年に死去し、万世永続の望みも3世（～前207）の短命に終わった。彼の秦王即位と習生誕の中間点に歿した杜牧（晩唐の文学者、803～53）は『阿房宮賦』で、「独夫之心，日益驕固」（独夫之心，日益しに驕固なり）の末の宮殿築造の未完と王朝の壊滅を嘆いた。

彼の七絶『遣懷』（懐を遣る。「落魄江湖載酒行，楚腰纖細掌中輕。十年一覺揚州夢，贏得青樓薄倖名」[江湖に落魄して酒を載せて行く，楚腰纖細掌中に輕し。十年一覺揚州の夢，贏ち得たり青樓薄倖の名]）に、美人の細い腰の形容が出る。楚の靈王が細腰の美人を好んだ為、寵を争って絶食し餓死する者が多く出た故事（『荀子・君道』等）は、上位者の好みに迎合する古今の風潮の典型である。

戦国時代の楚靈王（?～前529）の即位（前540）の2500年後（1959），楚腰作りと無関係の食糧不足の餓死が大量に発生した。爾後の3千万人窮死は前年の生産高水増しの罪が深く、「大躍進」を盛り上げる為に盛った虚偽の分も実績として計上された結果、農業税現物納付を差し引いた自家用の分は僅かしか無く、木の皮や草の根・土で腹拵える人も大勢居た。

1957年「5.1」の中共整風開始後、統戦部主催の民主党派責任者・無党派人士座談会が13回開かれた（5.8～6.3）。想定外の厳しい批判に衝撃を受けた毛は15日に「反右」指令を書き始めたが、当日に張奚若が偏向を指摘した4点（「好大喜功/急功近利/鄙視既往/迷信将来」[大を好み功を喜ぶ/功を急ぎ目先の利を逐う/既往を蔑視する/将来を迷信する]）は、毛に極めて深い印象を与えた。

官製伝記は建国後篇第17章（『《人民内部の矛盾を正しく処理する問題に関して》と整風反右（下）』）の特記と別に、次の次の章（『第2次訪ソ』）の後の『「大躍進」を發動する [上]』）で再び掲げる。毛は最高國務会議第14次会議（1958.1.28）で御気に入りの言葉として引用し（3点目は「輕視過去」に作る）、言い出したのは自分が大好きな人で、正義感が有り右派ではないと付言した。

彼は革命的で実情に合う「好大喜功・急功近利」は無くしては行けず、人類は世代毎に進歩し未来に希望を託すから「輕視過去・迷信将来」も必要だ、と張の是正要請を逆手に取った。雄偉・優位を好み功績・功利を貪る性分は、楚靈王時代の細腰流行の様な追従を惹起した。

大功も小利も求める強欲や既成の伝統を守るより将来の夢を追う傾向は、今も猶根強い。

「8大」2次会議で党の総路線（「鼓足干劲、力争上游、多快好省地建設社会主義」[大いに意気込み、全力で競って先頭に立ち、多く速く立派に無駄無く社会主義を建設する]）、15年で英国に迫り着き追い越す目標、「全国農業発展綱要」達成の5年前倒し（1967→62）を採択し、5中全会（5.25）・政治局拡大会議（26、28～30）を経て、毛は工業（特に鉄鋼・機械）・農業に精力を集中投下した。

彼は領域責任者と面談を重ね（5.31～6.19）、王鶴寿（冶金工業相、1909.4.19～99.3.2）・譚震林・趙爾陸（第1[民/軍用]機械工業相、上將、05.6.4～67.2.2）・宋任窮（第2機械[核]工業相、同、09.7.11～2005.1.8）・鄧子恢（副総理・中央農村工作部長、1896.8.17～72.12.10）の中で、主に1番手で唯一単独2回（5.31・6.4、各2・4.5時間）の王の御膳立てで、大風呂敷をどんどん広げて行った。

王は毛宛の報告書（6.6）で林鉄（華北経済協[カ・合]作区主任）との協議・合意を伝え、華北の粗鋼生産能力の大幅増、来年末の800万噸^{トン}達成には自信が有ると申し述べた。毛は翌日に1962年の全国生産高は6千万噸に達し得ると書き、8日に中央財經小組（10日に政法・外事・科学・文教小組と共に設立、組長＝陳雲）の副組長と組員に譚と王・陸に入れるよう指示した。

「反右」1周年の翌日（6.9）の政治局会議で、彭徳懐の国防相辞任要請と周恩来の総理進退伺いが却下・慰留されたが、彭は留任の結果11年後の同日に歿する賀龍の後を辿った。周は政治局・書記処直属の小組に権限を削がれ、実質的に外交のみを主管する身と成った。毛は穩健派の周・陳・鄧子恢より譚・王の威勢が好い声に耳を傾け、経済冒進に酔い^{なり}痴れた。

ビスマルク（独逸の「鉄血宰相」、1815.4.1～98.7.30）の「鉄は国家也^{なり}」と通じて、毛は「以鋼為綱」（鋼を以て綱と為す）の発想から鉄鋼生産で列強に伍しようとした。前年実績の535万噸も本年計画（2.3全人代、薄一波『國務院政府工作報告』）の624.8万噸（19.2%増）も物足り無く、中央工作會議（3.9～26、成都）で国家計委（主任＝李富春）修正案の700万噸が通った。

毛は成都で其々10・20年を掛けて英・米に迫り着くと煽動し、各地の指標の合計（国家経委[主任＝薄一波]纏め、4.15）の711万噸も満足できなくなった。5月末の政治局拡大会議で800～850万噸に上方修正されて間も無く、翌年の主要工業製品の生産高は電力を除いて英国を超えろと言う薄の見通し（6.17）に、彼は強烈な鼓舞を受け野望を際限無く膨脹させた。

毛は翌晩に中南海の遊泳池（専用水泳場に因む公・私邸の通称）で会議を招集し（政治局常委全員と彭真・李富春・李先念・薄一波・黄克誠・王鶴寿・廖魯言等出席）、粗鋼生産の去年比倍増（1070万噸）を王に求めた。王は鶴の一声に二つ返事で承諾し翌日に実行に移し、遣る気満々の対応が毛の称賛を得たが、全局に関する重要指標の左様な即座策定は余りにも荒唐無稽である。

伝記で19日夜に作る時間は陳雲の発言（8.21、政治局拡大会議）に拠るが、『毛沢東年譜（一九四九——一九七六）』（中共中央文献研究室編、全6巻、2013）では、毛の明言（8.30、同拡大会議。10.2、6ヵ国代表团との会見）をも紹介しつつ、考証を経て18日が正しいと結論付ける。10年後に出た同じ官製の後者の調査は信頼でき、「6.18」の陰影（瞿秋白処刑等）は又もや現れた。

冶金工業部党組（党外の指導機関中の党指導部）は21日、華東協作区（主任＝柯慶施）の次年度計画で、華東（山東を除く上海・江蘇・安徽・浙江・福建）の生産能力が800万噸に成ると報告した。石炭・鉄鉱石の資源が少ない広域から資源豊富な他地域を類推して、来年と1962年の生産は其々3千万超・8～9千万が見込める、という予想で毛は本年倍增の腹を固めた。

「超英赶美」「吹牛」・放言」「心血来潮」

毛は22日に報告書を7大（広域）協作区と中央・地方・軍の要人・部門に送れと命じ、同部の1962年主要冶金製品生産計画の報告書に、粗鋼の59年2500万噸・62年6千万噸で英・米を超えるように書いた。又17日の薄報告に『2年で英国を超える』の題を付けて軍委拡大会議での配布を指示したが、所定期間の15年は僅か1ヵ月で13年も飛ばされた。

毛は主席就任12周年の翌日に中共全国代表会議（1955.3.21～31）開幕式で、約数十年の内に世界で最も強大な資本主義国家に追いつかなければ為らない（「追上或赶上」）と述べた。同義の動詞（「追・赶」は追う意〔後者は急ぐ意も〕、動詞の後ろの補語「上」は上昇や達成を表す）は、米国との大差を弁えて長い期間の想定と共に「赶超」（追いつき追い越す）の前段に止まった。

同年10月29日の工商業社会主義問題座談会で初めて、米国に追いつき（「赶上」）而も米国を追い越す（「超過美国」）目標を掲げ、何十年掛るかは努力次第で、少なくとも50年、或いは75年かも知れないと語った。朝鮮戦争停戦後の集権強化達成時に経済で世界最強国への比肩を目指す意欲が湧いたが、控え目な75年は四半世紀単位（3/4世紀）の発想に基づく。

毛は「8大」予備会議第1回全会（1956.8.30）で、50～60年で米国を超える当きだと唱えた。曰く、米国の人口1億7千万・粗鋼生産高1億噸に対し、我々6億人は何故2億・3億噸を作れないか；追い越せない理由は無い；米国は60年前も400万噸しか無く、我々は60年遅れたが、50～60年有れば絶対に其（「它」）を追い越す筈で、これは一種の責務だ、と。

米国の今昔の25倍増に所要の60年を使う猛追の行方は、「它」（人間以外の生物・物事を指す三人称単数代名詞）が現在の米国を指すなら、容易に実現できるが格差の解消には成らない。共に発展し続ける両国の60年後を思い描く場合は、相手を遙かに凌ぐ加速度が必要である。毛は社会主義の優越性を信じ米国への対抗意識を燃やし、敢えて大変な挑戦を公言した。

50～60年行っても米国を超えないと、地球上から在住資格（「球籍」）を剥奪される、と言う彼は中華民族の人類への大きな貢献として、翌年に米国並みの鉄鋼生産への達成を50年とし（5.4、^{ビルマ}緬甸連邦民族院議長との会見）、8～10次の5ヵ年計画を以て経済で米国を追い越す予定（7.14～21、省市党委書記会議、山東青島市）で、期間（40～50年）短縮・領域拡大を図った。

『毛沢東年譜』所載の「15年超英」の第1声（1957年訪ソ中の波蘭党首との初回会談、11.6）は、同じ初披露の「東風压倒西風」の判断・意志（帝国主義に対し我々は優位〔「上風」〕を占めなけ

れば為らず、今や社会主義が優位を占めている、云々)に続いて、15年経てばソ連は米国を超え得、中国も英国を超える可能性が有るから、15年間の和平を勝ち取る必要が有ると言う。

3日後に英国(グレート・ブリテン)共産党(1920.7.31創立)主席・書記長との2回目の会談で、ソ連は15年後に総生産と1人当り総生産で米国を超える事が出来、中国は15年後に英国を超えると述べた。フルシチョフの重要製品対米超越宣言(1957.11.6)に触発された雄心の本格的な吐露は、鉄鋼と主要工業製品の生産高を指標とし、根拠を得る為の聞き取り調査もした。

彼は両者に英国の経済状況を詳しく訊ね、中国の粗鋼生産高の実績と見通し(本年は520万噸、第2・3・4次5ヵ年計画終了時[5・10・15年後]は其々1200万、2000万~2500万、4000万~4500万)を紹介した。英国の今の2千万噸は15年後に精々3500万に増えるだろうと予測の当否を問うと、多くとも3000万だと言われ、15年達成への確信に近い感触を得た。

毛は17日に中国人留学生を接見する集会で、15年(保険の為に5ヵ年計画3期或いは更に僅かな期間)で英国の鉄鋼生産高を抜くと宣言した。翌日の64ヵ国革命党大会で、ソ連は15年で米国を超えと言うフルシチョフの啖呵と呼応して、15年後に我々は英国に迫り着き或いは追い越す事可能性が有ると見栄を切ったが、その時点は未だ断定調ではなかった。

坐った儘で原稿を読まず即席演説を1時間した事は、^{ひとえ}一重に脳貧血の恐れで立った儘の発表が不都合だからである。彼は前回訪ソの際に西比利亜鉄道で首都へ向う途中、スベルドロフスク(州都エカテリンブルク)の駅の^{プラットフォーム}歩廊で気分転換の散策をしている時、極寒の風に当たった所為か突然^{めまい}眩暈に襲われ満面の汗が吹き出し、随員に支えられて車内に戻った。

彼は不慮の出来事で一時下車を止め、既往症の影響が長時間の直立も慎重に成った。20日にゴムウカの表敬訪問を受けた時、坐ってお喋りする(「吹牛」)なら何時間も行けるが、立って話すなら倒れて了い、特に原稿を読むのは駄目で、もう死んで了う;国内では死ぬ程に緊張したが、今度は原稿を読まず生き生きとし、今後はもう原稿読みが嫌だ、と言った。

冗談混じりの「吹牛」は^{よもやまばなし}四方山話をする事に言うが、原義の「法螺を吹く」は大/空/虚言癖に符合する。1958年粗鋼生産倍増の「6.18」決定も彼の「8.30」講話で、6月19日の会合の「吹」(放/漫談)の所産とされた。放漫・粗雑な決断は毛・王の掛け漫才に聞えるが、5ヵ月後に15年で英国を超えると世界に広言したのは、既決ならぬ思い付きの即興である。

年譜の「5.29」記事4点の最後(政治局拡大会議)は、毛の「对不起」(済まない)で始まる。彼は各協作区主任等を帰途の飛行機・汽車から呼び戻した挙動の釈明として、26~28日の会議で中央と地方の分権に関する議論が尽くされなかった事を挙げた。急な召還を反省した衝動的な「心血来潮」(考えが閃く。行動を思い立つ)は、「大躍進・超英赶美」でも目に余る。

12月2日、劉少奇は中華全国総工会(労働組合連合、1925.5.1成立)「八大」で中共を代表して、15年後にソ連の工・農業が主要製品の生産高で米国に迫り着き或いは追い越すと連動し、我々は同じ期間に鉄鋼と他の重工業製品の生産高で英国に迫り着き或いは追い越す

よう頑張る当きだと宣言し、毛の一念・独断を追認し中央・全党・全国の共通認識に化した。

「功狗・二把手」「成則為王」「伴君如伴虎」

「1大」選出の中央局3人団のNo.2（陳独秀総書記と李達宣伝主任の間）の張国燾組織主任は、^{ソビエト}「中華蘇維埃共和国臨時中央政府」中央執行委員会の3人指導部（毛主席+項英・張副主席）にも入った（1931.11.27 [34歳の誕生日の翌日] 当選）。彼は後に合法的中共政権の中央人民政府委員会副主席2位→国家副主席1位→同主席の劉少奇を、毛の「功狗」（功臣走狗）と吠えた。

10月革命14周年時（11.7）に江西瑞金県で成立した「共和国」は名称もソ連縁で、「蘇維埃」^{āi}（露語 совет, 評議会）は2月革命（労働者・兵士等が帝政君主の専制政治を倒した蜂起, 露暦2.27 = 西暦3.12）後の革命指導機関（労兵会）から、10月革命後に農民代表評議会と合同し権力機関を成したが、時の中共は実効支配地域を「蘇（維埃）聯（邦）」に因む「蘇区」と称した。

中華工（労）農兵蘇維埃「1大」は前年の「11.7」に開催する予定であったが、第1次反「圍剿」（政府軍の包圍討伐）戦争（1930.11~31.1）の為に延期した。続いて連勝を収めた第2・3次（4.1~5.31, 7.1~9.15）後の挙行（11.7~20）は、満を持した開幕の日選びに10月革命への尊崇が表れ、閉幕日は巡り巡って49年後に林彪・江青集団裁判の初日と成った。

毛の「国家」中執委・人民委員会主席は合法政権樹立後も無い元首・総理兼任に当るが、当選の6日後（11.25）組成された中華蘇維埃中央革命軍事委員会の主席は朱徳、副主席は王稼祥（1906.8.15~74.1.25）・彭徳懐である。「建軍の父」朱が45歳と成る日（12.1）の「銃から政権が生れる」現れて、毛・項・張連名の中執委布告は中国に2つの国が有ると告げた。

中華民国は「帝国主義の道具」で自分は搾取・抑圧を受ける労農兵の国家だと唱えた中共は、勿論「満州国」（日本が作った傀儡「国家」、翌年3.2成立、「首都」=新京 [現吉林省都長春市]) を認めず、李濟深（軍総参謀長等歴任, 1級上將, 1885.11.6~1959.10.9）等が反蒋介石「福建事変」（33.11.20~34.1.21）で建てた「中華共和国人民革命政府」（11.22発足）とも手を組まなかった。

民国に対する承認も人民共和国の成立時に終り、「偽“満州国”」と同じ国家扱いせぬ表記で、台湾の元首・閣僚職名（総統・外交部長等）は所謂を表す引用符が付き、中央研究院・国立台湾大学の属性詞（傍点部分）も鉤括弧に入るか削る。「成則為王，敗則為寇」（成れば則ち王，敗ければ則ち寇。勝てば官軍，負ければ賊軍）の故，内戦中の中共政権は国家分裂に該当されない。

中華蘇維埃共和国と同日成立の紅4方面軍は1932年7月に国軍30万人の猛攻を受け、総帥張国燾の不当な指揮で連敗を喫し遂に鄂（湖北）豫皖根拠地から追い出された。「中央蘇（維埃）区（域）」は敵軍30個師団投入の第4次「圍剿」（1933.2~3）に勝ったが、同10万人参戦の第5次（33.9.25~34.10）に対しては李徳の拙劣・硬直の所為で一敗地に塗れた。

長征は強行決戦の末の敗走に他ならず、中央紅軍は4方面軍と合流した際（1935.6.12, 四

川懋功地区) 8.6 万人から 2 万人弱に激減した。最大勢力 (8 万) に成った張は政治局内の自派 9 人増員 (過半数達成) を求め、2 人しか認められず武力併呑^{どん}の邪心が起きた。毛は葉劍英 (紅軍前敵 [対敵前線] 総指揮部参謀長) の密告を受けて、紅 1 軍団・中央機関を率いて北上した。

張は自軍及び中央紅軍の一部 (朱徳・劉伯承等同行) を南下させ、10 月 5 日に第 2 の中央を立て自ら主席と成り、毛・周恩来等の党籍を剥奪したが、作戦の失敗と共産国際^{コミンテルン}の介入で翌年 6 月 6 日に取消し、西北局書記の任命 (7.27) を受けた後に実権を失った。陝甘寧辺区政府副主席在任中に国民党に寝返りし (1938.4.3)、除名 (18) 後に反共工作の要職に就いた。

抗日の為の第 2 次国共合作で中共は中華蘇維埃共和国を廃し、陝甘寧辺区 (7.17 国民政府承認) を行政院 (内閣) 管轄下に置いた (1937.9.6)。1 国中 2 国の対戦から 1 国 2 制度の共存に移った後、張は名誉職ながら辺区政府 No.2 (林伯渠主席に次ぐ唯一の副主席) と為る。建党から準最高位級を数度経験した彼の離党は、建前上「友党」への鞍替えとしても衝撃的である。

中共の裏切り者として活躍・影響力が乏しい儘、台湾・香港・加奈陀に移住し (1948, 49, 68)、回想録等の著述を残した後に異国の老人養護施設で 83 歳の人生を閉じた (79.12.3)。凍死説も有り孤独な客死と思われ勝ちであるが、1 歳若い劉少奇の 10 年前の惨死には勝る。1976 年の脳卒中・右半身不随も薄幸の印象が持たれるが、毛は同年に 82 歳で先に歿した。

作家^{デビュ} (出世作『陳勝』 [長篇小説, 1977]、84 年中国作家協会 [49.7.23 成立の中華全国文学工作者協会より 53.10 改称] 理事、86 年空軍政治部文化部文芸創作室創作員) 出身の將軍劉亜洲 (88 年 [軍委辦公庁政治部幹事] 大佐→2012 年空軍上將、最終職務=解放軍国防大学 [86.1.15 設置] 政委^{インタビュアー・ノンフィクション}) は、口述実録文学形式の短篇政論『二把手』(No.2 [の要職者]) で、張・劉の生き / 死に様を冷徹に対比させている。

中央辦公庁秘書局勤務 40 年超の古参幹部を語り手とする記述・論評は、「二把手」は常に悲しい運命を負うという中国の「官場」(官界) の恐ろしい法則を明かす。歴代の宰相は確な結末が滅多に無く、「伴君如伴虎」(君に伴うは虎に伴うが如し) は彼等の経験と血・涙の告発に違ひ無く、中共の場合は増々「顛扑不破」(如何に敲いても破れない) に成った、と断じる。

好例と為る劉は張が貶めた「功狗」の通り、今日の毛が有る結果の最大の功勞者であり、彼は「毛沢東思想」の概念を發明し、「7 大」の党規約改正に関する報告で 100 回余り毛を礼賛した。毛は延安整風で出来た親密な友人として劉・陳伯達・胡喬木・高崗・陸定一・彭真、そして周揚を挙げ、1 番目の劉に対する論功行賞として後継者にし公表もした、と言う。

延安で唐僧玄奘三蔵 (602~64) が天竺 (印度) へ大乘經典を取りに行く内容の演劇を観た時、毛が突然隣の民主人士に一行中の最も意志が確固たる者は唐僧で、最も揺れ動いたのは猪八戒だと語り、左手の 1 席隔てた張を指さして「彼が長征中の猪八戒だ」と放言した。張が激怒して席を蹴り「無恥」(恥知らず) と応酬した処、劉が「住嘴！」(黙れ) と怒鳴った。

その一幕を追憶する語り手は毛が先に罵り、而も張の反撃に無言だったから、劉が跳び出たのは些^{ちよ}か行き過ぎだと感じる。劉の応援で毛は張に圧勝し、劣勢の張は尻尾^{しつぽ}を捲いて逃げ

だが、彼は真に聡明な一休（室町時代中期の臨済宗の僧、1394～1481）で、多倫多トロントの養老院での病歿も劉の死に方より遥かに綺麗で人情味が有る、と作者は取材対象の口を借りて評する。

劉亜洲は長征勝利 17 周年時（1952.10.19）に生れ、父徳建（最終職務＝蘭州軍区後勤部副政委、少佐、23～2000.12.13）は準高級幹部に過ぎないが、李先念の 3 女（4 子中の末子）小林（同＝中国人民対外友好協会 [54.5.3 成立] 会長、53.10.21 生）の夫として、1990 年代以降の政・官・軍・財界の中樞に多い「太子党」（中共要人の子弟・姻戚から成る特権階層や派閥）の一員である。

「文革」後文学の「審父」（父性的権威を告発し先代の功罪を裁く）意識は、毛・劉・周恩来を描く 3 短篇の辛辣な批判に現れる。同音の「公狗gōnggǒu」（雄犬）に引っ掛けた「功狗」は彼だから憚らず頷けたが、「狡兎死、良狗烹」「敵国破、謀臣亡」と暗合する。江青も法廷陳述（1980.12.24）で毛の「狗」と誇らしく自称し、忠犬・番犬・寵物ペットを叩く時に飼主かいぬしの体面を慮るよう訴えた。

「2.3」交代、「6.19/8.16」特筆、「9.1」号砲

周恩来は「9.13 事変」後のある日、紀登奎と 2 人だけが残る会議室で突然嗚咽おえつを漏らした。紀は驚いて林彪の自滅で国家が好く成るから喜ぶ当きだと宥めたが、君は何が分かるか、事はそんなに簡単じゃない、と周は声を荒らげて斥け更に号泣した。彼は政治・経済・外交の運営で毛と衝突する必然性や、昇格後の No.2 の宿命的な悲運を感じずにいられなかった。

「良狗」劉の廃棄・「良弓」林の破滅後も毛の専制が保てたのは、古来の帝王＋宰相の両輪の片方を超能吏の賢相が務め続けた為である。周逝去の 26 日後（1976.2.3）に毛の指令で華国鋒が総理代行と成り、筆頭副総理鄧小平の職能を外交に限定し（4.7 解任）「凡（庸な）宰相」（同日代行より昇格）を選んだ事で、毛の死に至るまでの 7 ヶ月の政権は死に体に近い。

陳錫聯（北京軍区司令、上将、1915.1.4～99.6.10）が葉劍英に代って軍委の日常運営を司る異動も、18 年前の民主人士閣僚解任・全人代代表資格剥奪（1.31）と共に、大寒～立春（76 年は 1.21～2.5）間の「陰冷」（どんより曇って寒い）と通じた暗愚な決定である。「良/功狗」の「良・功」とも突出しない「凡将」の重用は、「愚（直な）忠（誠）」度が決め手で手詰りを物語る。

「一個好漢三個幫」（1 人の好漢は 3 人の協力者が付く。幾ら有能な人でも他者の助けが要る）と言うが、毛は民主人士との提携を解消し、異端の党内実権派を排除し、「文革」派だけを信用した。類義の「紅花還要綠葉扶持」（赤い花も猶緑の葉の支えが要る。どんな立派な存在でも周りの協力は不可欠だ）と照らせば、従順・有能な葉（劍英）まで切り捨てた自己孤立は損である。

別の熟語の「衆人拾柴火焰高」（皆で薪を拾えば炎も大きく成る。皆で協力すれば大きな力に成る）は、「拾」の代りに言う「捧」（両手で掲げて持つ）は煽てる・持ち上げる・褒めそやす意も有る。周りが全て毛に迎合するから、外遊中の 15 年で英国に追いつく広言も追認・助長された。毛の勇み足点火と衆人の燃料添加が相俟って、怪気炎びの瀾漫の中で火の球が炸裂した。

1958年の『人民日報』元旦社説は15年前後の期間で上記目標を達成した後、20～30年を掛けて経済で米国に追いつき且つ追い越すよう唱え、米国と並ぶに至る年数を35～40に短縮させた。周恩来が提起した15年で農業の単位面積生産量が日本を超える目標（前年12.8、毛と民主党派責任者・無党派民主人士の面談時）は、南寧会議以降の当人失速・後退と共に消えた。

毛が各10・20年で英・米に迫り着く新目標を提起した（3.14、成都会議）6日後、王鶴寿は第3次5ヵ年計画を見据えた期間再短縮の建議を出した。英国の粗鋼生産高の現2200万噸は1967年に精々3300万（年4%増）、米国の1.02億は余り変らないと見て、中国は62年1500～2000万→67年の3500～4000万に達せば後10年で米国に迫り着ける、と言う。

党主席就任15周年時の詳細な論証と大胆な進言は影響が大きく、毛は4月2日に波蘭政府代表団との会見で英/米に迫り着く所要期間を10年或いは少し多い/20年に改めた。15日に論評『ある合作社を紹介する』の原稿で、英・米に迫り着くまでの時間は以前の想定程の長さは要らず、25年或いは少し多い時間で十分だ、と四半世紀に収めようとした。

彼は同日に劉少奇・周恩来・陳雲・胡喬木・呉冷西への手紙で、各10年で英・米を超える心算に5～7年の余裕を持たせる意図を説明した。胡は再短縮に意外な要人たちを代弁して婉曲に再考を促し、結局『紅旗』創刊号（6.1）の掲載で、工・農業生産が資本主義の大国に迫り着く事は、前に考えていた程の長い時間はもう要らないかも知れない、と修正された。

毛は27～29日に広州で工業問題会議を招集し、劉少奇等の要人の他に、彼が指名した王鶴寿・彭濤（化学工業相、1913～61.11.14）・滕代遠（鉄道相、04.11.2～74.12.1）・張霖之・余秋里（石油工業相、中将、14.11.15～99.2.3）と劉景範（地質部次官）・劉瀾波（水利電力部次官〔前電力工業相〕、04.10.1～82.3.5）・李葆華（同、09.10.2～2005.2.19）・李銳（同、17.4.13～19.2.16）が参加した。

毛は「好大喜功」宣言の「1.28」講話で合理的な「平均先進定額」（指標）を心掛けたが、領袖の切望に応える様に2つの省庁から15年で米国に迫り着く構想が出され審議された。彼は困難な要素も十分に考える当きで、米国に迫り着く事は一先ず内部に控えるとした。然し上下双方の動力・圧力の相互作用で、総路線の「多・快」に沿う壮語の相乗が加速した。

翌月の「大躍進」発動の「8大」2次会議の熱気衝天の中で、経済計画を仕切る穏健派の李富春まで7・15年で英・米に迫り着くと調子を上げた。毛はその2目標を7年・+8～10年に微修正したが、元旦社説所定の最終実現期限を半分以下の15～17年に縮めた。次の3・10年への引き上げ（6.21、軍委拡大会議）は、翌日に又3年→2～3年又2年に飛躍した。

譚震林は6月25日、華東の本年の食糧生産は1人当たりが1千斤に達し（当初4～5年後と予想）に達し、全国総生産は5千億斤超の見込みだと報告し、毛は大喜びで「躍進」煽動中の『紅旗』に発表させた。規範と成る4省1市は東北3省と並ぶ農業発達地域で、仮に見当違いでなくても後進地域を含む全国平均に当て嵌めるのは、巨大な誤差が生じかねない。

官製伝記は毛の一連の指示から、目まぐるしい高指標を信じ大きく影響されたと推定す

る。毛は反右傾保守の指針を提起し、各階層の指導者は次々と毛以上の高い目標を掲げ、毛は更に高い要求を出す、という農業合作（集団）化（1951.12～56.12）以来の反復を指摘する。農業合作化の反右傾（1955.8～10）以降の悪習は、「好大喜功」の産物として今も消えない。

毛は4月下旬に前人の「烏托邦」理想を実現・超越する数十年後の農村像を夢中に語り、各自の工業・農業・小～大学・商業施設等を持つ共産主義の公社が大量に現れる奇想は、劉少奇と共に居合せた陸定一が「8大」2次会議で公表する（5.19）と、忽ち一部の地域で公社創設の実験が始まり、譚が6月末～7月初に河南遂平県嵒山衛星公社の経験を紹介した。

毛は河北・河南・山東の農村への視察（8.4～10）で大型公社の成立を勧め、河南新郷県七里營で看板を見て「人民公社という名前は好い」と褒めた（8.6）。「この味がいいね」と君きみが言ったから七月六日はサラダ記念日」（依万智〔歌人、1962.12.31生〕著歌集『サラダ記念日』[87]の表題作）に擬えて、この名が好いと君が言ったから当日は人民公社記念日にしても可い。

薄一波著『若干の重大な政策決定と事件の回顧（修訂版）』（1997）に、「6.19」「8.16」が鉄鋼工業発展史上の「2つの偉大な日」として記される。1958年生産倍増決定の56日後の政治局常委・大協作区主任会議（河北秦皇島市北戴河）で、7月末時点の実績（380万噸、年計画の35.5%）に由る危機感から、各地第1書記が指揮する全党/民の粗鋼生産倍増作戦が決った。

毛は翌日に『嵒山人民公社簡易規約（草案）』を修正し、『紅旗』9月1日号に発表させた。農村で人民公社を設立する中央決定（8.29、政治局擴大會議採択）に続いて、『人民日報』「9.1」社説は粗鋼生産の倍増を全党・全国民の目の下で最重要の政治任務とした。習近平の29年後の再婚と54年後の党首権限掌握の起点は、毛時代のこの熱気沸騰の日に重なる。

「浮夸 / 共産風」席卷, 「高指標」心酔, 「(地)球籍」維持

官製伝記（建国後篇）第22・23章『「左」を糾す努力（上・下）』は、人民公社・「全民煉鋼」の破綻～廬山會議前の調整を克明に綴る。公社設立全面展開の翌々月（1958.10）、「浮夸 / 共産風」（誇張 / 私有制全否定の風潮）が擡頭した。毛は中央工作會議（11.2～10、河南省都鄭州）を招集して対策を練り、時代遅れの「農業發展綱要40条」に代る指針の制定を試みた。

既成文書（『一九五六年到一九六七年全國農業發展綱要』）は、中国史上初の農業・農村の中・長期發展計画である。草案の提起（省市党委書記會議、1956.1.5～9、杭州）・検討（同、57.17～21、山東青島市）後、修正草案が形成（8期3中全会、9.20～10.9）・下達（10.25）された。更に全国民の討論を経て再修正する予定であったが、4ヵ月後に目標大幅更新の怒涛に埋没された。

習近平党首再任の丸60年前に公布された修正草案は、「反右」勝利・反保守強化の中で出来、第3次5ヵ年計画終了時の目標は高く設定された。1958年3月の成都會議で、遼寧（省委第1書記＝黄東東 [05.9.14～93.11.28]）・広東（同＝陶鑄）は其々3・5年で残りの10年分を実現

すると請け負い、毛は「左派」とからかい3年には懐疑的ながら3～5年なら可いと言った。

河南省(省委第1書記=潘復生 [1908.12~80.4.29])は1年以内に、「40条」所定の到達目標の「4・5・8」(食糧の畝当り生産量平均、黄河・秦嶺以北地域が400斤、黄河以南・淮河以北地域が500斤、淮河・秦嶺以南地域が800斤)を達成し、水利化・「4(種類の)害(虫/鳥)」(蚊・鼠・蠅・雀)駆除・文盲絶滅も成し遂げる、と白日夢を打ち上げて毛の基本的な肯定を得た。

毛は3回目の講話(党首就任15周年時の3.20)で、河南の計画は粗雑ながら実験的に行らねば可いと認め、総路線が正しい限り1年、2年、3年乃至5年で「40条」を完成しても、不面目や不名誉には為らぬと語った。裏を返せば10年の任務を5年で終えないと沽券に関るので、同時に戒めた業績の捏造・誇張と「争名」(名を争う)は不可避に成った。

毛は翌々日にマルクス主義の經典的著作に対する迷信の打破、大衆の詩作量産を提唱し、続く欧陽欽(黒龍江省委第1書記兼省長、1900~78.5.15)・陶鑄・李先念・林鉄の発言は追隨し、領袖を無条件に信任す当きで、中国には個人崇拜の問題は存在しない、という論調も出た。毛の「思(考回)路」に沿って希望以上の志向を示す事は、各階層の幹部の新常態と成った。

閉幕の前日(25)の第5次講話後、張徳生(陝西省委第1書記、1909.10.20~65.3.4)・胡喬木・鄧小平・陶魯筋(山西省委第1書記兼省政協主席、17.2~2011.5.21)・周恩来・薄一波・滕代遠・劉少奇・彭徳懐が発言した。官製伝記は最重要級の中央指導者が集中的に毛を称揚した事を建国後初とし、正常な任期なら4期目初頭に当る頃の特記事項は個人崇拜への傾斜を示す。

毛は開幕の翌日(10)の第2次講話で個人崇拜を正しい/正しくないの2種類に分け、真理を持つマルクス=エンゲルス=レーニン=スターリンを永遠に崇拜せねば為らぬと述べた。2年来のソ共のスターリン批判・個人崇拜禁止を対象・路線の両面で否定する言説は、毛に対する信頼・服従は迷信・盲従の程でなければ行けない、という柯慶施の極論を誘った。

「1大」代表の陳公博(1892.10.19~1946.6.3)は翌年脱党後25年に国民党に入り、実業相等を務めた抗日戦争前から汪精衛(党副総裁・行政院長等歴任、83.5.4~44.11.10)に従い、汪の歿後に日本の傀儡政権(40.3.30成立)でNo.2から首位と成った(戦後処刑)。彼は汪を持ち上げて、主義への信頼は迷信の程、領袖への服従は盲従の程でなければ行けない、と言った。

年頭の南寧会議で毛の意に適う「頭号標兵」(最大の模範)に成った柯と逆に、黄敬(初代天津市長、第1機械工業相、1911~58.2.10)は、毛の「右傾」の面罵で精神が崩壊し、散会後の広州行きの飛行機で李富春の前で土下座して命乞いした。入院中に飛び降りて怪我した奇行は歿42年後の姫鵬飛自害を連想させるが、彼は「文革」前の要人「非正常死亡」に数える。

毛の猛威を示す1齣で「右傾」断罪の破壊力も現れたが、3月に「40条」達成の大幅短縮を誓った河南の潘復生は「8大」2次会議(前半病欠)で、呉芝圃(第2書記、1906.3.16~67.10.19)に「右傾日和主義」と非難された。「文革」以外に稀有の1級行政区頂上政争のNo.2の下剋上成功として、潘は解任され(5.18)「反党集団」の他2名(部下)と共に左遷された。

1・3・5・8月の会議（南寧・成都・「8大」2次・北戴河）で押し上げた大躍進・人民公社熱は、11月鄭州会議で減速・降温を強いられたが、毛は超冒進の呉を新「40条」起草の総責任者に指名した（工業・農業・教育科学文化・公社体制小組の責任者は、王任重・曾希聖〔安徽省委第1書記、1904.10.11～68.7.15〕・舒同〔山東省委第1書記、05.11.25～98.5.27〕・史向生〔河南省委書記処書記、12～2002.11.8〕）。

在任2ヵ月強の呉を4年強の王（湖北）・舒と7年弱の曾の上に置き、河南の非大物（第1書記・書記以下）を3省の第1書記と並べ、河南の省都で開催する配置には、公社を生み超高速を謳った地域・指導者への期待が窺えるが、『人民公社發展綱要40条』『共產主義建設10ヵ年規（企）劃綱要』の構想には、毛は流石に難色を示し現実離れの後者を即座に却下した。

10年で粗鋼生産高が4億噸に達し、食糧畝当り生産量平均が「40条」目標の「4・5・8（百斤）」から「新4・5・8（千斤）」に成る、等の意向に対して毛は反対せず非公表を要求した。起案議論の3日目に毛は総責任者を鄧小平に切り替え、文書題も実務的な『15年社會主義建設綱要40条』『人民公社の若干の問題に関する鄭州會議の決議（草案）』に変えた。

次の政治局擴大會議（11.21～27、武昌）では「新40条」は御蔵入りし、過大指標に対する毛の圧縮は翌年計画の粗鋼2700～3000万噸→1800万に及んだ。8期6中全会（11.28～12.10、同）は全民所有制・共產主義へ移行する急進等を非とする半面、基本建設投資・粗鋼生産高を除く目標は北戴河會議の決定を維持し、左傾是正の軌道修正は生温く中途半端であった。

1959年の省・市・自治区党委第1書記會議（1.26～2.2）の目標微調整、第2次鄭州會議（政治局擴大會議、2.27～3.5）の反「共產風」、上海會議（同、3.25～4.1）の本年經濟計画目標の検討を経て、8期7中全会（4.2～5、上海）で一部下方修正され（粗鋼は1800万→1650万噸）、最終修正（政治局會議、6.13）で粗鋼は前年「8.30」決定の4割台の1300万に落ち着いた。

毛は1956年8月30日「地球籍」維持の為に米国を追い越す必要性を訴え、2年後に閉幕した北戴河會議は無理な目標を立て、後の調整は第2期全人代1次全会（1959.4.18～28）で公表する機会を逸した。毛は一再の失策に過誤を認識し後悔を覚え反省・修正を重ね、官製伝記の「大躍進」の部分は存命中の無謬神話と違って、当時の自責も後世の批判も多い。

〔4.30〕辞意、〔5.5〕賛意、〔7.14〕上申

1958年暮れの6中全会は毛の次期国家主席候補に成らない建議に同意し、毛は党主席の専念で党・国の方針・政策・路線に精力が集中でき、マルクス＝レーニン主義の理論工作に時間を多く充て、国事に対する指導的役割も妨げが無く発揮し得る；就任しなくても各民族の全国民の領袖で、将来特殊な状況と人民の意志・党の決定に由り再び担当し得る、とした。

毛は事務・儀礼嫌いの性分や昼夜颠倒の生活習慣から国家主席の職務を鬱陶しがり、初当選の翌々年（1956）から続投しない意向を先ず党内で表明し、57年整風開始の前夜（4.30）

に民主党派責任者と無党派民主人士に告げた。「反右闘争」勃発・「大躍進」発動等の情勢の変化で暫く棚上げされた後に、次期全人代発足の5ヵ月前に念願の一件落着と成った。

官製伝記の第22章（『左』を糾す努力[上]）に有る再三の意志表示の例は、1956年夏に北戴河で「八大」政治報告の修正を討論する期間中、数十人が参加する会議でこの意見を述べ、57年4月30日に天安門城楼で各民主党派の責任者と無党派人士を招いて座談し、又この動議を提起した、と言うが、官製年譜では前者は見当らず、後者は場所・性格が異なる。

第17章（『人民内部の矛盾を正しく処理する問題に関して』と整風反右[下]）の記載は、1957年4月30日に頤年堂で最高國務会議第12次（拡大）会議を招集し、全党の整風運動が議題であり、44人（党と国家の指導者・各民主党派の責任者・無党派民主[前掲表現で欠落]人士）が出席し、毛が国家主席を担当しない問題は席上で初めて党外人士に吐露した、と特筆・詳述する。

彼曰く、来年の全人代で必ず国家主席を辞し、問題の研究に精力を集中させ易い様に仕事を減らす；瑞西には7人委員会が有り、大統領は順番で当るが、我々は数年毎に交代しても可く、逐次的に身を引く政策を取る；賛成されなければ仕方が無い、人に押し付ける事が出来ない；賛成されれば少し情報を外に流す必要が有り、然も無いと民衆は理解でない、と。

中国語の「吹」は否定的な「吹牛」「吹嘘」（吹聴）、肯定的な意を兼ねる「鼓吹」の他に、中性的な「吹風」（其と無く知らせる）も有る。英語の briefing（要約説明・報告。報道機関への事情説明等）に当る「吹風会」は、党内整風・国家主席交代に関する「4.30」会議の性質と為る。毛の辞意表明も広報前の「狭報」（「小範囲吹風」と言えるが、党外側には寝耳に水であった。

年譜の当日の記事2点は当該会議（午前、中南海頤年堂）が2頁分の8割強を占め、毛の講話抜粋（44行中42行）の最後の1行半が再任辞退の旨である。天安門への登楼は翌日の午前国際労働節祝賀大会への臨席（ポロシーロフ[ソ連最高会議幹部会議長、元帥、1881.2.4~1969.12.2]も同席）、夜の花火大会・広場での大衆交歓の観賞であるが、党外人士の登場には言及が無い。

天安門での民主人士への披露を誤記と断じ得る傍証には、陳叔通（実業家・政治家、中華全国工商業連合会[1953.10.23成立]初代主任委員・全人代副委員長・全国政協副主席、1876~66.2.17）・黄炎培の劉少奇・周恩来宛の「5.1」書簡が有る。前日に虚を突かれた党外参政の両重鎮は当人への対面直訴の場が無いから、毛の辞意に対する不賛成を迂回して伝え再考を促した。

両書とも2頁弱で両者の手紙と毛の「批注」（評語）の要点を採録し、国家の鞏固さの不完全と台湾の未解放、国際2大陣営の抗争激化という再任要請の理由に就いて、何れも4年の続投で解消できないと言い、集団指導中の突出した個人の威信は国民を束ねる重要な一環だという主張に対して、民心を維持する自分の威信は不再選で損なう事が無いとした。

陳・黄は国家主席の任期4年とする憲法規定の後に、連続当選は2期を超えないと制限を加えよう提案した。毛は同意し改正の準備を指示し、初代（自分）の1期止りの理由も並べた①中央人民政府主席+国家主席は已に通算8年、②憲法制定時からの起算で再選1期は可能だが、

連続せずに4年分を貯め、祖国防衛戦争の類の重大事件で自分の出番が求められた場合は1回再任する。

全党整風の初日の党外人士の提言を採用した結果、相応の憲法改正（1982.12.4）の前後に連続2期以上の例は未だ^{ためし}1度も無い。毛は実質的な3期目を嫌がり、劉は毛の妨害で2期も全うし得ず、職位自体も「文革」初頭～改革・開放の4年半後に存続しなかったが、江泽民も党首退任後2年近く軍委主席の座に居直った半面、国家主席は時限通り2期で退いた。

「4.30」講話は瑞西の元首輪番制を肯定する一方、賛成の獲得を辞退の前提とした。彼は全人代代表・全国政協委員も参加する討議を望んだが、3日後（5.8）の政治局拡大会議の絶対多数の賛成で可決された。習近平再任の6日前（2018.3.11）の憲法改正で無制限に変わったが、毛の個人崇拜奨励の初講話の60年後の翌日の転換も、党首・多数派の力の所産である。

毛は国家主席として最後に仕切る最高国务会議（第16次、1959.4.15）で、劉少奇が次期主席候補に成る理由として党で自分を代行し得る立場を挙げた。建国以来の副主席1位の朱徳は昇格せず全人代委員長（劉の後任）に転じ、劉は党内序列優先の原理で元首に昇ったが、当選（整風運動に関する中央指示の発出2周年時の4.27）は毛との関係や政局に変化を齎した。

『二把手』の語り手は劉主席誕生の翌日の『人民日報』を見て、毛と並ぶ同じ寸法の大きな顔写真の笑顔を訝る。控え目で厳粛な表情が相応しいのに、帝王じみた貫禄を示すのは無防備に感じられる。「天無二日、国無二主」（天に二日無く、国に二主無し）という古来の警句に照らすまでもなく、党・国家の両主席が並び立つ構図は毛の至尊の地位・形象に抵触する。

1959年は冒進^{ツケ}の代償で劈頭から冷え込み、国家主席交代の前に全国で「春荒」（春の食糧不足）が起きた。前半の再三の調整で理性を幾分取り戻した処、毛は32年振りの帰郷（湘潭県韶山^{しょう}、6.25 [朝鮮戦争勃発9周年]～28）後、7月1日（建党38年記念日）に廬山に着き、翌日から政治局拡大会議を主宰したが、「神仙（気楽で闊達に議論する）会」は驕^{やが}て大乱に襲われた。

毛は昨年の評価を成果9分・欠点1分から7～9分対1～3分に直し、均衡的發展・農業重視の方針で偏向の是正を図った。その真摯な姿勢に影響されて会議内外で失政への不満が続々と現れ、経済が守備範囲外の朱徳も超然たる態度から一変して、（採算を度外視する）人民公社の食堂は全部駄目に成っても悪い事とは限らないと直言した（7.6 [17年後の逝去の日]）。

毛の国家主席「禪讓」は何も引責辞任の意味が無いが、「大躍進」の挫折に抱く責任感は一層強かった。故に痛い処を突かれ続けると堪らず、第2次講話（7.10）で功過の比率を9対1に戻し、批判意見を一昨年の「右派」の攻撃に重ねた。己・党の治世・権威への異論に対する寛容を不寛容へ反転させる豹変は、整風開始→反右開始の39日よりも短くなった。

毛は彭徳懐の「7.14」上申書を翌々日に無断で配布させ、討論中の同調多数を見て23日に全体会議を招集し、情緒的な訓示で異見を封殺した。彼は長男の戦死・次男の発狂を自分の過誤への天罰とし、衆人の惻隱の情と彭の罪悪感（志願軍司令部勤務の毛岸英を守れなかった過失）を誘い、更に李立三～高崗・饒漱石の4回の路線闘争や彭等との過去の不和に絡めた。

10 件の事を行って 9 件が失敗したら減ぶ当きで、その際に自分は農村に行く、解放軍が従わなかったら紅軍を結成する、という恫喝の殺し文句で満場に戦慄が走った。彭は軍の No.2 として前 / 後任の朱徳・林彪（及び次の葉剣英）と同じ転落の宿命を負い、毛は政治局常委会議（建軍 32 周年の前々 / 当日）で彭（列席）に党の瓦解を企む等の大罪を被せた。

毛の激越な反応と厳酷な処理は幾重も逆鱗に触れた故で、政権の基盤を成す軍の枢要の彭・黄が「大躍進」を擁護しない事も、前党首の張聞天が彼の最も忌み嫌う文官・将帥結託を犯した事も、周小舟が自分を晩年のスターリンに譬えた事も、彼の短い導火線に火を点けた。スターリン批判の中国版を恐れる被害妄想が高じて、劉少奇までその猜疑で失脚した。

「軍事倶楽部」「一個好漢三個幫」「轟轟烈烈」

8 期 8 中全会（建軍節の翌日開幕）は 9 ヶ月に亘る反「左」を終え、「右傾機會主義」の攻撃と党分裂の傾向を大敵とした。毛が同日の張宛の手紙で関与を咎めた「軍事倶楽部」は追及され、彼は 11 日の全体会議で彭を「資産階級 / 反動的」と断じ、16 日の閉幕式で党内闘争を階級闘争に直結し、「文革」の「党内の資本主義の道を歩む実権派」排除の発端を作った。

張・黄・彭は相継いで毛に謝罪文を提出し（8.18・20, 9.9）、其々 7・14・17 年後に毛の第 1 次紅衛兵集団接見・林彪等除名・毛殞の日と重なる。軍委拡大会議（8.18～9.12）の彭・黄糾弾で一部の将領が追放されたが、最大の受益者の林彪は軍委第 1 副主席に進んだ 12 年後の翌日、凄惨な死に方で墜落・全焼し、身元鑑定のためソ連側に頭部を切断され持ち去られた。

「彭黄張周反党集団」は当初周恵（湖南省委常務副書記、1918～2004.11.18）の名も有ったが、周小舟（同第 1 書記）との重複・格差や中国人の偶数好みの為か毛は「～周周」から削った。後の「彭羅陸楊」「江張王姚」も性別がともかく「一個好漢三個幫」の 1+3 に合致するが、毛が妻等の小宗派を名付けた「4 人幫（組）」（幫＝扶助、互助集団）は、早くも定型が現れた。

毛は 7 月 11 日「父母官」（故郷の省・県の長官）の両周・工業秘書（兼務）の李銳と懇談する際、昨年の農業生産の過大目標を反省した。周小舟は『礼記・緇衣』に見える孔子（春秋時代の思想家・教育家、前 551～前 479）の「上好是物，下必有甚矣」（上は是の物を好めば、下必ず甚だしき者有り矣）に擬えて、「上有好者，下必甚焉」（上好む者有れば、下必ず甚だしき焉）と評した。

儒教始祖の逝去 2400 周年に中共が創設し、生誕 2500 周年に中共政権が樹立した。彼は「文革」の批判を浴びたが、件の命題は建党 100 年後も真理である。聖孟子（戦国時代の思想家、前 372～前 289）の歿 2200 年後、辛亥革命が封建時代を終焉させた。中華民国成立（翌年）100 周年の習近平党首就任も時間の連環で繋ぐ史縁を持ち、古今不易の底流を思わせる。

毛は廬山会議の議題（14 → 18 個）・基調を示す講話（中央指導者＋協作区主任会議、6.29、武昌 / 7.2）で、15 年で主要工業製品の数量が英国に迫り着き、追い越すという標語は堅持すると

説いた。来年の粗鋼生産の目標は今年より400万噸増の1700万、再来年は2千万、明々後年は2100万～2300万と成り、此で英国に迫り着ける、と懲りずに高望みを唱えた。

彼は8月18日に増産・節約運動を展開する全会決議に就いての論評で、1958年からの15年で英国に迫り着く事は完全に可能だと断定した。同決議（16日採択）は前年の狂奔号令の「回声」（木霊）の様に躍進の速度を強調し、「反右傾」の鞭撻と「鼓干劲」（行る気を奮い立たす）の激励の下で、前回以上の「轟轟烈烈」（威勢好く勇猛壯烈）の大衆運動が推進された。

河北省委の「9.3」業績速報（粗鋼・石炭生産高の急上昇、農業生産競争の新展開）を始め、地方・中央官庁から増産見込みが次々と報告された。国家統計局は「9.6」見解で前年の発展不均衡を「右傾」論調として否定し、翼賛野党から中共の傘下に納めた「衛星」（翼賛）紙の『光明日報』は12日に、論説『10年で必ず英国に迫り着ける』で「衛星」（超高数値）を放った。

毛は視察（9.19～24、天津・山東・河南・河北。10.23～30、天津・済南・合肥・馬鞍山〔安徽〕・上海）で、精選された超豊作耕田・優良企業を普遍的水準と錯覚し、景気の好い報告を好景気の確認にした。彼は1960年の水利建設等の目標の下方修正と逆に、粗鋼は1800万～2000万噸に高め、72年に米国に近付けば特大の好い事だと語った（政治局拡大会議、11.30～12.4、杭州）。

李富春提起の翌年計画に対する論評（11.30）で、鋼材480万噸に対し600万超は可能と上乘せした。李は食糧6500億→7600億斤・綿花6000万→6700万担（1担＝100斤）等の増産を根拠に、1960年の工・農業総生産の前年比は59年の37%に続く31%増と報告した。毛は本年の食糧目標未達（7500億→5400億）で懸念したが、減少は絶対無いと陶鑄が言った。

毛が前日に審査した『人民日報』元旦社説『六十年代を展望する』は奮闘の目標として、10年で工業製品の生産高が英国に迫り着き或いは追い越し、完全な工業体系を基本的に築き上げ、工業・農業と科学・文化の現代化を基本的に実現する事を挙げた。1960年及び60年代の「継続（持続的）躍進」にも自信に満ちている、と短+長距離疾走の号砲を鳴らした。

政治局拡大会議（1.7～17、上海）は国家計委の構想を批准し、10年「超英」（昨夏の全会所定）を5年倒して実現し（1962）、8年で4つの現代化を基本的に完成する（67）目標に向けて、本年を「大躍進年」とし粗鋼生産高を1840万噸と定めた。毛は資産階級統治の300年を大躍進と称し、中共（政権）は何故23年（～1972）で彼等を超えられないだろうと言った（1.9）。

李富春招集の7閣僚・2計委副主任座談会（2.14）で、粗鋼生産の10年で1億噸達成、13年（1967）で全ての国に迫り着き追い越す構想が出た。毛は20日に興味深い文書として林彪と諸元帥に転送し、25日に国家経済委員会党組（薄一波主任が兼務）報告（2.13）の本年目標の2000万噸+若干に就いて、頑張って2200万に成るようと論評した。

彼は「3.17」会議（華東6省1市第1書記+譚震林・李井泉・胡繼宗〔湖南省委書記処書記、1920.5～74.7.4〕、浙江寧波市→杭州の専用列車中）、本年2200万噸→来年3000万→再来年4000万を既定目標の様に語った。領袖の再点火・圧力と各方面の迎合・競合の結果、1958年に勝ると

も劣らぬ蛮勇が振われ、59年冬～60年春の生産・建設は未曾有の滅茶苦茶であった。

「苦（い結）果」は2期全人代2次総会（3.30～4.10）の頃に顕在化し、衣食に関しては綿花が無い所為で上海の紡績工場が操業を停止し、全国規模の食糧難が起る等の緊急事態が発生した。毛は農業順調・食糧年生産6000億斤超の断言（譚震林・廖魯言，4.30）に安堵したが、実際（2870億）と倍も有る差は農業主管の両要人も把握できない各地の水増しに由る。

毛は「4.13」会議（李富春・李先念・薄一波・陳正人・張霖之・彭涛・趙爾陸・王鶴寿出席）で、粗鋼生産高1300万噸余りでは見下され、1億に成ればもう見下される事は無い、と高い目標に執着する心理を説明した。中央批准（5.30）の冶金部の本年計画（公式発表の1840万、確実完成を目指す2040万、努力目標の2200万）は、他ならぬ毛の理念・情動に沿った設定である。

後の政治局拡大会議（6.10～18，上海）は前年「6.13」政治局会議と同じく目標を下げ、毛は最終日に認めた『十年総結（総括）』^{したため}で自分の過ちを認め、閉会講話で前年の北戴河会議で自ら1959年の粗鋼生産3000万噸を唱えた事は「発狂」だとした。1962年か少し後に英国への追い着き或いは追い越しは可能だと周恩来が言っても、要検討・公言不要と斥けた。

「7.5」講話（政治局常委拡大会議，北戴河）では1969年1億噸達成の構想を撤回し、日本・西独に習って量より質や種類の完備を追求し、62年の3千万の実現後7年で7千万～8千万を目指すとした。中央工作会議（7.5～8.10）は基本建設の縮小、重点目標の確保、努力目標の廃止を決めたが、内外の2正面作戦の緊迫で7月予定の「8大」3次会議が流れた。

「7.16」背信，「7.31」激憤，「11.28」自省

ルーマニア
羅馬尼亞労働者党（1921.5.8 共産党成立，48.2改称）「3大」（6.20～25）の2日目、フルシチョフは演説で平和共存を主張し中共の帝国戦争不可避論を否定した。中共は共産圏12カ国党代表団会談（24）でソ連勢に攻撃され、彭真団長は反論し予定外の共同声明の再考を求めた。中央の自制方針で共同声明（27）に署名し、同時にフ党首批判・団結希望の声明を出した。

閉幕の10年前の朝鮮戦争勃発で中国はソ連の援助承諾を得て出兵し多大な犠牲を払ったが、ソ連は空軍出動の約束を破り武器・装備供与も中国の対朝無償と違って折半負担にした。中国は朝鮮戦争関連を含む軍事・経済分野で対ソ借款を十数回（1950～55）重ねたが、ソ連の専門家引き揚げ・協定破棄・援助停止後、最長5年内の返済が俄か過重の負担と為った。

31日の中央工作会議で周恩来は来年の返済額（借款+貿易の現物債務=23億^{ループル}留^{ループル}〔年譜に拠る。伝記では貿易負債25億に作る〕）を報告し、「群情（衆人）激憤」（年譜の言）の中で完済を頑張る決意が固まった。その場で飛び出た「争気」（負けん気を出す）は列強への猛追・対抗の情念にも有り、翌日の毛の唯一の所載公務は執心を現す様に薄一波と鉄鋼に就いて話し合う事である。

毛は7回の全体会議で2回だけ短く講話し、前年の北戴河会議での亢奮と打って変って

沈鬱が目立ち、日課に近い海での水泳も長い滞在中（7.3～21、26～8.16）5～6回だけした。重圧を配慮して鄧小平は閉幕式で彼の了解を取って暫く休養に専念するよう配慮したが、会議採択の食糧・鉄鋼生産確保を中心とする指示も情勢の好転に繋がらず彼を癒せない。

毛は外貨獲得の為に10月から肉を食べない、と呉旭君（看護婦長、1932.7.26生）に告げた。官製伝記の脚注で併記された汪東興の証言は、12月1日に来年元旦から豚肉と鶏を食べないと言った事に為る。下袴^{スボン}の帯^{ベルト}をきつく締めて（飢えを堪えて）返済に励むという合言葉の通りの痩せ我慢は、国民と甘苦を共にする模範として美談に成り、窮境を示す衝撃も大きい。

身長180^{センチ}（推定）の彼の体重はその結果75^{キロ}に下がったが、肥満度指数の24は標準的22より9%高く肥満と為る25に近い。「有錢難買老来瘦」（金が有っても老来の瘦身は買い難い）という養生訓に照らせば、後に命取りと成る心肺疾患の心配を減らす有益な「減肥」（瘦身）の様に思えるが、肉食系の中国人にとって長期的に肉を控えるのは悲壮な犠牲とも言える。

農村「共産風」の破壊は10月から国難へと発展し、食糧の不作（最終的に1957年より26%減）で無数の人命が失われた。毛招集の農業現状報告会（中央指導者+華北・中南・東北・西北4大区の省・市・自治区の主要責任者、10.23～26）で、河南・山東の深刻な被害が暴かれた。特に河南信陽地区の100万人余りの餓死や迫害死が^{むご}惨過ぎて、要人等に甚大な衝撃を与えた。

人民公社の先駆と「高産衛星」で有名な遂平県を擁する信陽では1959年に、地委が食糧生産高の20万噸超を50万にして省委に報告し、9万の買い上げ任務を超過して16万が強制売却され、個人保有分は年50^{キロ}強しか無かった。異郷移住は禁じられ中央への通報は郵便局で遮断され、食糧の底を突いて人々は座して死に、売却が不十分な農民は多く殺された。

志願軍参戦10周年記念日（1960.10.25）の翌日、毛は信陽事件に関する李富春の報告書（21）に善処を指示した。朝鮮出兵の戦死者（約14万人）を遥かに上回る犠牲は建国以来最大の人災で、左傾を批判された呉芝圃は極刑に処されても承服すると^{さんげ}懺悔した。2年前の鄭州会議で毛に「新40条」起草の総責任者に指名された彼は、桁外れの野望と無能で仕途を葬った。

農業・教育科学文化部分の責任者だった曾希聖・舒同の治下の安徽・山東、東北・西北第1書記報告会（25日に緊急招集）に出た張仲良（1907～83.2.27）が主管する甘肅も、100万人超の「非正常死亡」を出した激甚被災5省の内に入る。毛は27日に会議を開いて全国の食糧供給と山東・河南問題を討議し、同月の張解任に続いて舒・呉は翌年1・7月に左遷された。

同会議の出席者（劉少奇・周恩來・李富春・柯慶施・李井泉・譚震林・陶铸・宋任窮・李雪峰・劉瀾涛）中の李も、第1書記を兼務する四川は最多の1000万人超で最も罪が深いと見られる。然し中央・内閣要人に次ぐ6中央局第1書記の内、同じ政治局委員の柯・譚（書記処書記・副総理）の間に在り、後の4人と別格の高位は安泰を保ち全人代第3副委員長に昇った（1965.1）。

「大躍進」発動の翌々日の中央全会増補の3政治局委員と常委・副主席に進んだ林彪は、尊崇や急進の言動で毛の歡心を得た「喜ばせ組」で、重用が意図通り左旋回に拍車を掛けた。

更に奇妙な布陣として、舒の後任の山東省委第1書記は曾が兼務した（～1961.4）。暫定的な非常措置とは言え類を見ないし、両省とも重要で且つ被災が深刻だから余計に異様である。

曾は暗号読解に長け軍委第2（情報）局局長として長征の勝利に大きく貢献したが、407万人死亡の被災が栄光で相殺し得ない汚点と為り、隠蔽も到頭ばれて問責・解任された（1962.2）。毛は2局を暗夜行路の中の提灯に譬え、その導きが無いと長征は想像できないと称えたが、曾は「大躍進」中の提灯持ち的な迎合や他省との業績競争で、安徽を暗黒な袋小路に導いた。

彼の初代党・政首長（1952.1 就任、52.8～55.3 兼務）の要職は、殊勲を立てた長征の重要性の証とも取れるが、長征の転換点と成る貴州の遵義は60年12月上旬の中央指示で、山東・河南・甘粛と並んで深刻な幹部腐敗・民生窮乏が告発された。毛は「11.15」指示でも悪質な幹部の無法蛮行を社会主義の敵とし、「共産風」是正を重点に正常化へ向うよう命じた。

公社の「共産風」を糾す中央「11.3」緊急指示書簡で「反右傾」は終止符^{ビリオド}を打ち、毛は貫徹状況に関する甘粛省委の第4次報告（25）を中央局と省・直轄市・自治区に転送する際、中央名義の指示（28）に毛の言葉を引用する形で自己批判を盛り込み、公社の集団所有制→全民所有制の移行は3～6年で出来る（北戴河決議中の自身執筆部分）は速過ぎると反省した。

ソ連の専門家引き揚げの終了時（9.1）に1周年を迎えた「全民煉鋼」は、燃え尽きの末11月21日から粗鋼・石炭生産と輸送が日増しに下り坂を辿った。粗鋼生産目標の必達を政治問題とする中央緊急指示（12.3）の厳命の効き目で、1860万噸より6万噸超で決勝点^{ゴールライン}に到着したが、ぎりぎりの合格は2段上乘せの努力目標（7.5%、18.3%高）の虚しさを実感させる。

「闘争的（の）哲学」「凶虚名・招実禍」「三分人禍」

鉄鋼工業発展の「偉大な日」の「58.8.16」（全党/民に由る鉄鋼工業推進の決定）の1年後、8期8中全会の閉幕で「反右傾・継続躍進」の幕が開けられた。同日に毛は随想『機関銃と迫撃砲及び其の他』で、廬山で起きた闘争は階級闘争で、階級闘争は階級の消滅で始めて終息する；共産党の哲学を「闘争的（の）哲学」とする資産階級の政治家の言は正しい、とした。

「以鋼為綱」より長く毛時代を貫いた「以階級闘争為綱」は、廬山会議後から鮮明に成った。「共産党の哲学は闘争の哲学」の命題は、頻りに闘争を鼓吹する習近平にも刷り込まれている。習党首就任の52年前の「11.15」指示は「文革」前段の農村社会主義教育運動の伏線を敷き、中央工作会議（12.24～翌年1.13）は4年後の「4清」関連会議と2重写しに成る。

毛は会期中の3回目の現状報告聴取（12.30）で、又「共産風」に対する中央の責任を認め、成果と欠点の比率を9対1から7～9対1～3に戻し、1958年より酷い失敗を天災と「人禍（災）」の結果とした。建設は「逐步」（1歩ずつ）行^やるしか無く、恐らく半世紀は要る、と感慨深く述べたが、英・独・日を抜いて世界2位の経済大国に成るのは正に50年後である。

年中無休の「大煉鋼鉄」は歳末の掉尾ちようの一振で生産目標未達を回避したが、「強弩之末、勢不能穿魯縞」（強弩之末魯縞に入る能わず。『漢書・韓安国伝』の言）の通り、強弩（勢いの強い石弓いしゆみ）で射た矢（中央発の指令）も昨秋以来の消耗で勢いが衰え、魯（現山東）に産する薄絹をも貫けない程に力が尽き、鉄鋼の為に犠牲を強いた農業も含めて経済の弱体化は谷底に落ちた。

冬至の翌々日からの工作会議では一陽来復の意気込みも弱まり、『人民日報』1961年元旦社説から「大躍進」は引込んだ。年譜所載の毛の当日の執務は、整風運動と生産・災害救助に関する信陽地区党委の報告書への指示である。生活改善を喫緊の要務に追加した件は満身創痍の窮状に由り、「綱」（要かなめ）の鉄鋼生産も減速・足踏みに切り替えざるを得なかった。

3日に哈瓦那（玖馬の首都）市長等との会見で、粗鋼生産が英国を追い越す時期を訊かれた時、英国の2千万噸と我々の1800～1900万からして長い時間は掛らないが、質では遠く及ばず、人口（5千万対6.5億）比にしても大した物ではない；去年には10年で主要工業製品の追い着きを言ったが、2年連続の災害で今後3年間に工業の歩幅を縮める、と開陳した。

夜型の彼に合せた21時からの会見が終った後、22時20分から同じ頤年堂で政治局常委（周恩来・林彪不在）・中央官庁責任者・中央局書記等21人を招集し、本年経済計画に関する李富春の報告を聴いた。毛は粗鋼生産目標の1950万・1900万・1870万噸の3案に就いて、前年並みの1870万にも懸念を示したが、9日の同会議では衆意の1900万を了承した。

毛は工作会議の閉幕式で、当日（13）見た西独・英・仏の前年実績（3400万・2400万・1700万噸）を挙げ、何れも長年に亘って達成した水準で、我々も数年間ゆっくり行やって仕切り直し、来年・再来年は着実に進み、「不要図虚名而招実禍」（虚名を図って実の禍を招く様にしては為らない）と戒め、今年は「实事求是」（出典＝『漢書・河間献王劉徳』）の年にすると唱えた。

彼は8期9中全会（1.14～18）の閉幕式で、幾ら何でも7年後には粗鋼生産高が英国・日本（前年2200万噸）に追い着き乃至追い越し得ようと期待しつつ、葉劍英・李維漢（統戦部長、1896.6.2～1984.8.11）が建議した本年計画の1845万に賛成した。建党～建国の29年より少ない20年で経済の経験を取得できないかと問い、本年は調査の年に成るよう呼び掛けた。

3年前の同時期の南寧会議以来の冒進は遂に再燃の意志も余力も無くなり、「超英赶美」の掛け声も前年末から廢語と化した。1961年9月23日、モントゴメリー（英国の陸軍元帥・政治家、子爵、1887.11.17～1976.3.26）に対して、中国で強大な社会主義経済を建設するには50年では行けず、100年或いはもっと長い時間が必要、と半世紀未滿の夢まで潔く捨てた。

史上最多の7113人が参加する中央工作（拡大）会議（1962.1.27～2.7）で、柯慶施が劉少奇の書面報告への不満から15年で英国に追い着く標語の存廢を質した。毛は「1.30」講話で中国の人口の多さ・基盤の弱さ・経済の立ち遅れを理由に、世界で最も先進的な資本主義国家に追い着き追い越すのは100年余りが無いと駄目だ、と現実的な見通しで答えた。

2年後に中ソ意識形態論争イデオロギーを討議する政治局常委会議で、12年で経済面に米国を追い越

すフルシチョフの願望に言及すると全員が笑った。1958年の「大躍進」で我々も同じ「急於求成」（成功を焦る）の過ちを犯した、という共通認識が持たれた。「好大喜功，急功近利」に対する張奚若の指摘と毛の肯定は，人命や労力・機会の甚大な犠牲で是非の判定が出来た。

毛は地球への戦争（自然の改造）に挑み，15年で英国に追い着くのは現実的だとしたが，技術革命の基と為る科学尊重が精神万能論に殺がれ不毛の地に沈淪した。「人定勝天」（人は必ず天に勝つ）の信条に由る乱脈開発は自然破壊を招き，英国との比肩は15年も要らず2～3年で出来るとの豪語（1958.6.22）は，15年後の接近（2665万対2522万噸）で笑い種に成る。

毛は「大躍進」発動と妄動の始動の3年後，中央工作会議（1961.5.21～6.12）の閉幕式で，58・59年の冒進・「反右傾」の過ちを認め，客観的法則に反した事への懲罰を受け入れた。1958年「1.31」の民主人士閣僚解任・全人代代表資格剥奪から，不毛・受難の4年が経ち，彼は「7千人大会」に於ける「1.30」講話で，猛省を見せて信任回復・失点挽回に繋がった。

劉少奇は初日の口頭報告で農民の言葉を借りて「七分天災，三分人禍」と総括し，毛の1960年「12.30」講話の欠点1～3割・「人禍」提起に沿う判断は，全国の県委書記まで集う場で毛の責任を際立たせ不興を買った。毛は9月の10中全会で習仲勳肅清・階級闘争強調を以て逆襲し，4年後に劉と7千人大会で毛の誤りに触れた彭真を倒して屈辱を晴らした。

年譜記載の毛・哈瓦那市長会見の陪席者（彭・馮基平 [北京市委常委兼外事工作小組組長・副市長]・章漢夫 [外交部次官，1905.11.7～72.1.1]）は，後に相繼いで秦城に投獄され最後（68.3）の章は獄死した。1人の好漢に3人の協力者が要ると諺は言うが，毛は「不斷革命」と並行する継続肅清で独夫と化し，「凶虚名，招実禍」を戒める「1.13」も6年後に劉と永訣する日に成った。

「人民戦争」「除四害」「困剿麻雀」

毛は再度訪ソでソ連の人工衛星発射成功・15年で米国を追い越す目標に刺激されて，1958年初頭に「不斷革命」の志向と技術革命の重点を提起したが，「5.4運動」が掲げた民主・科学と逆の非民主・反科学の所為で蛮行に愚拳を重ねた。物量主義・人海戦術の大衆動員製鋼で俄造りの小高炉60万基が粗大廃棄物と化した始末は，「人民戦争」の敗北に他ならない。

毛の「四害」駆除・疾病撲滅の課題提起（1955年冬）を受けて，「農業40条」草案（56.1.25）は本年から5・7又は12年内に鼠・雀・蠅・蚊を基本的に消滅すると定めた。同年夏の中国動物学会（1934.8.23成立）第2回会員大会（青島，8.23～28）で，雀は害鳥ではなく撲滅に反対すると専門家たちが異論を唱えたが，領袖の認識と中央の認定には到底敵わなかった。

周建人（生物学者・政治家，時の高教部次官，魯迅 [本名周樹人] の実弟，1888.11.12～1984.7.29）は，『雀是害鳥無可懷疑』（雀は害鳥，疑う余地無し。『北京日報』57.1.18）で当局の方針を支持した。彼は翌年から要職（浙江省長・全人代副委員長・全国政協副主席）を歴任し，中共黨員（覆面）な

から中国民主促進会の創設（1945.12.30）に関り第2代主席（79～84）と成り、党の信頼が厚い。

「40条」修正案（1957.10.26公表）は前年から12年内に可能な地域で「四害」を基本的に減らし、雀の撲滅は作物を保護する為で都市や森林地帯では消滅しなくて可いとした。第2次民主人士削減の内閣改造の翌日（1958.2.12）、中央・國務院は「除四害講衛生」（四害駆除・衛生重視）指示で、10年又はより短い期間で蠅・蚊・鼠・雀を撲滅する任務の達成を求めた。

毛の党首就任15周年時（3.20）に四川が先陣を切り、3日間で1500万羽が命を奪われた。北京・上海の3日集中作戦（4.19～21、27～29）で、401160・505303羽の戦果が上げられた。8ヶ月で19.6億羽の（^{パナソニック}弾弓等に由る）射殺・毒殺・（騒擾に由る）疲労致死は、物凄い数である。滑稽な全住民投入の費用対効果以前の問題として、抑々雀は害虫の天敵として有益である。

「轟」（大音響を出す。追い払う）戦法を使う「轟轟烈烈」の大量抹殺の結果、1959年に耕田や都市の樹木が虫害に蝕まれ生態系の均衡が破壊された。にも関わらず毛は廬山会議で「除四害」に関する異論と遅緩を叩き、特に雀を大問題とし退治を厳命した（7.10）。専門家は都市の特例を顧みぬ上海の一掃方針を批判したが、「反右傾」の空気の中で少数の声は弱かった。

良識代弁者の張勁夫（中国科学院党組書記兼常務副院長）は報告書・資料で雀の益・害を論じ、都市・森林地区・果樹園には有益か益が害より多い事を指摘し、雀の乱獲が深刻な虫害を惹起した普魯西・^{フロイセン}米国・^{コスト・パフォーマンス}仏蘭西の教訓を紹介した。毛は2日後（11.29）に翌日開始の杭州会議の配布文書に指定し、科学・技術工作要人が投じた一石で運動開始2年後に転機が訪れた。

毛は1960年3月15～17日に、柯慶施・曾希聖・舒同・江渭清（江蘇省委第1書記、10.11.26～2000.6.16）・江華・楊尚奎（江西省委第1書記、05.10.24～86.7.7）・葉飛（福建省委第1書記兼省長、上將、14.5.7～99.4.18）と譚震林・胡繼宗を携えて、杭州→寧波鉄道沿線で視察した。専用列車で開く華東6省1市第1書記会議の初日、彼は「除四害」対象の差し替えを提起した。

雀は赦免して可く、「臭虫」（^{とこじらみ}床虱）に変えると言う修正は、翌日に起草した衛生工作の中央指示（18日発出）でも、新しい「^{スローガン}口号」（「除掉[去]老鼠、臭虫、蒼蠅、蚊子」）に反映された。24日の政治局常委拡大会議（天津、～25）で「除四害」の総括として、雀以外は緩めで、雀だけが受難したが、その「党籍」を回復し、^{ユークリア}床虱に変える事を建議する、と諧謔的に語った。

名誉回復に譬える党籍回復は、参加者の中央要人（他に劉少奇・周恩來・鄧小平・彭真・薄一波・李先念・李富春・王鶴寿・彭濤・張霖之・呂正操〔鉄道相代理、上將、1904.1.4～2009.10.13〕・趙爾陸・陳伯達・胡繩〔中央政治研究室副主任・「紅旗」副編集長、18.11.1～00.11.5〕・吳冷西）の内、No.2の劉が歿10年半後に与えられたが、「文革」前期のNo.4の陳と同じ永遠除籍は改正が有り得なかった。

一方の地方首長（歐陽欽・黃火青〔遼寧省委第1書記、1901.6.20～99.11.9〕・吳德〔吉林省委第1書記、13.2.5～95.11.29〕・烏蘭夫・林銑・陶魯筋・万曉塘〔天津市委第1書記、16～66.9.19〕・張仲良・吳芝圃・王任重）にも、中央の彭・薄・呂・陳と同じ「文革」中の投獄経験者が居り（烏・王）、胡の様に迫害を免れた人も少ない（吳）が、党籍剥奪の処分は「文革」の厳罰の割には適用が極少ない。

毛の雀赦免論と同日に落成した秦城監獄は上記の数人の他、北京「困剿麻雀」（雀包圍討伐）総指揮を務めた王昆侖副市長（1902.8.1～84.8.23）をも取めた。1968年2月収監・囚人番号「6842」の彼は、訪中の従弟顧毓琇（^{いく}米国籍華人・教授、02.2.4～2002.9.9）が周恩来に陳情した（73.8.29）結果、周が慙愧（^{ぞんき}）を表し尽力を約束したにも拘らず75年3月に漸く牢屋から出た。

王は入党（1933）を隠して国民党の上層部で統戦工作を行い、再入党（50）後も中国国民党革命委員会（48.1.1 結成）中宣部長を務め、党籍公表（77）後に同最大翼賛政党の主席と成った（81）。中共の民主党派への浸透・支配・抑制（「文革」中活動停止、1977.10 再開）を体現した彼も、「高鳥尽、良弓蔵」の宿命から逃れられず、赦免・名誉回復も雀より数倍遅かった。

王の生誕は建軍の丸25年前（江華の恰度5歳上）で、逝去は満32・54歳時の中国動物学会成立・「2大」開幕の日に重なる。「反右」前年の学会で専門家は中央決定に異を唱える勇氣・自由が有ったが、10年後は「8.24」の老舎自殺・李達惨死の様に建国前の暗黒時代に逆戻りした。国慶節に周恩来から老舎受難の経緯を訊かれた後、彼の失脚で副市長陣が全滅した。

上海の総攻撃も北京と同じ朝5時に一斉に始ったが、「滅雀」総指揮の金仲華副市長（報道人・国際問題専門家、中国新聞社社長等、無所属）は、首都総指揮の「囚号」と連番の様な年月日に61歳の人生を自ら絶った（1907～68.4.3）。上海の行政指導部も曹荻秋市長（1909.8.1～76.3.29）の獄死、李幹成副市長（09.11.8～93.4.14）の長期拘禁等で、壊滅的な迫害を受けた。

雀を害鳥として駆除する大衆運動は兇戯に等しく、識者の建言で漸く「四害」から除外されたが、見直しを求めた朱洗（細胞学者、中国科学院実験生物研究所副所長、1900.9.13～62.7.24）は歿後、毛と雀撲滅を命じた（1744）フリードリヒ2世（第3代普魯西王、^{プロイセン}12.1.24～86.8.17、40.5.31即位）を同列に論じたと難癖を付けられ、墓・墓碑が壊され遺体が掘り出されて曝された。

「40条」草案所定の5～12年内の「四害」撲滅は、4年後に対象が再定義され、10年後に「文革」で中断し、12年後に前出の両「滅雀」総指揮が受難した。公布の丸25年後に「四害」の悪名が付く「4人組」は判決を言い渡されたが、特別法廷と特別検察院の長を務める江華・黄火青は其々、毛が雀の赦免・「党籍」回復を述べた「3.15・24」会議に居合せた。

「9.15」吉日、「12.21」宣言、「1.17」再出発

雀を救った張勁夫も8年近く失脚したが、1975年から財政相・安徽党政首長・國務委員兼国家経委主任を務め、享年101まで長生きした。彼の毛時代の大貢献は国防科学技術（原爆・誘導弾開発が目玉）の推進で、『1956—1967年科学技術發展遠景（長期）規劃綱要』草案（國務院科学規劃委員会、中央56.12.22批准）前倒し達成の62年に国家科技委副主任を兼務した。

『毛沢東伝』（建国後篇）第19章『「大躍進」発動（上）』の書き出し（「一九五八年は、人民共和國の歴史に、深い痕迹を残した」）の重い・暗い感じと対照的に、第14章『「十大關係を論ず」

から八大（下）』の第1段落（「一九五六年九月十五日は、記念に値する日である。この日の午後二時、中国共産党第八次全国代表大会は全国政協講堂で厳かに開幕した」）は、明朗・高揚の調子である、

建党100年来19回の党大会の内「8大」は最も開明的・民主的で透明性が高く、生産力の保護・発展を主要任務とする国是、党規約中の毛沢東思想の削除、個人崇拜反対の強調、集団指導体制の樹立、報告・決議起草の協議・経緯の公表（『大会日誌』）、外国代表団の招待出席、中央委員の得票順に由る序列（「7大」方式の踏襲）は、以降は無いが徹底しなかった。

第9章『新中国の初の憲法』で大写しされたこの日は、1954年の第1期全人代第1次総会開幕式（中南海懷仁堂）である。毛は政治宣言風の開会の辞で、経済・文化が立ち遅れた国家を数次の5ヵ年計画の期間内に、工業化し高度の現代文化を持つ国家に築き上げると唱えた。温家宝の12・14歳の誕生日に当る両盛会開幕の「9.15」は、由緒有る吉日と言える。

「8大」閉幕の「9.27」の1年前に元帥・大将授与式が有り（懷仁堂・國務院講堂）、2年前の全人代総会（閉幕の前日）で毛・劉少奇・周恩来が国家主席・全人代委員長・國務院総理に選出/任命され、7年前に中国人民政治協商会議第1期全体会議（9.21～30）で国都・紀年・国歌・国旗が決定されたが、丸8年後の8期10中全会閉幕で「文革」への左旋回が始まった。

習仲勳批判が後半の重点と成った同全会予備会議（1962.8.26～9.23）の閉幕の8年前、周は『政府工作報告』で工業・農業・交通輸送業・国防の現代化を提起した。毛首唱（1957.2.27）の現代的工業・工業・科学文化を受けて、周は工業・農業・科学文化・国防の現代化に直し（58.7.7）、毛も首肯した4分野の組み合わせを「四個（4つの）現代化」と表現した（60.2.23）。

周は更に工業・農業・国防・科学技術の現代化に変え、科技を鍵とした（1963.1.29）。23年間又は今世紀末までに4つの現代化を実現する事に力点を置くと云った（同年8.23）後、順番が農業・工業・国防・科技に変わった（9.30）。工業を1番にする中央指示も有った（1965.9.2）が、第3期全人代第1次総会に於ける『政府工作報告』（64.12.21）で農業が1番に戻った。

周は余り長くない期間内に社会主義の4つの現代化を実現する奮闘目標と、2段階達成（先ず第3次5ヵ年計画〔1966～70〕から15年を掛けて、1980年までには独立し比較的完全な工業・国民経済体系を築き上げ、今世紀末には4つの現代化を全面的に実現し、我国の国民経済が世界の前列を歩む様にする）の戦略構想を宣言し、「1964.12.21」が「四個現代化」建設の出発点と成った。

当日はスターリン生誕85周年（本人改竄に由る公式発表）に巡り合せ、改革・開放の起点を成す11期3中全会の閉幕（1978.12.22）も一陽来復の頃に隣り合うが、開幕は「鉄鋼の（人）」（筆名由来の通称の露語の意）生誕100周年（真実）に当る。スターリン化した毛も彼の独裁者の亡霊を垣間見せ、周の「四個現代化」宣言の前日に劉少奇と激突し肅清の殺気が生れた。

毛は『政府工作報告』初稿に対する2段落（268・372字）の加筆（12.13）で、階級闘争・生産闘争・科学実験の不断の発展を説き停滞・悲観・無為・慢心を戒め、常規を打破し極力先進的技術を採用して長くない期間で現代化の強国を築き上げるよう唱えた。科学技術先

進国の水準に「赶上」（追いつく）の目標・自信の処に、「和超過」（又追い越す）を付け加えた。

周は世界最前列への意欲を前面に出さず4つの現代化を目指すと言った（1963.8.23）が、翌年末の宣言では「最」抜きの「走在世界的前列」が終極目標として掲げられた。「分兩歩走」（2歩〔段階〕に分けて歩む）戦略も「跑」（走る）と違う漸進を強調するが、毛は世界各国の技術発展の旧い路を歩み、他者の後に付いて1歩1歩と這う事が出来ない、と書き足した。

曰く、中国では大躍進が起ると言う今世紀初めの孫文の予見は数十年以内に必ず実現し、我々は西方（側）の資産階級が数百年を掛けて到達した水準に、数十年の時間で追いつき又追い越さなければ為らない；大躍進は「吹牛皮，放大炮」（法螺を吹く。大言を吐く）ではない、と。東方の無産階級も出来我々が遂げた偉業として、彼は原爆実験の成功を好例に挙げた。

猶恋々として已まぬ「大躍進」の失敗で、毛が廬山全会の初日に告げた党大会の開催（1960年春）は消え、第3次5ヵ年計画も予定（63~67）より3年遅れた。第2→3期全人代発足の5年8ヵ月に対して次の10年は所定の2倍に当るが、時機（1975.1.13~17）が17年前の南寧会議と一部重なる4期1次総会でも、周は初日に同じ「四個現代化」宣言を繰り返した。

南寧会議が寄与しなかった年頭発令の技術革命は、5年後の周の科学技術現代化・「科技が鍵」の提唱、7年近く後の毛の先進技術の積極導入の指針でより具体化した。科技発展12ヵ年計画の5年前倒し（3年国難の最終年）達成は、工業・農業・民生の不振と対極に在る。毛時代の現代化建設の進展最速・成果最大の領域は、第3・4複合の国防科技に他ならない。

毛は農民の苦情に基づいて雀の撲滅を決める前に専門家の意見も聴いたし、作物の単位面積超高生産を信じた決め手も銭学森（空気動力・制御工学学者、1911.12.11~2009.10.31）の論説である。銭は机上の空論で理想尽めの条件を並べ現実離れの推論で毛と世論を誤らせたが、本業の国防科技では「東風」誘導弾を始め多くの尖端項目の画期的な突破を導いた。

外債償還等の為にひもじい思いに耐える中で、陳毅外相は^{スボン}下袴^{しち}に入れても原爆は作ると豪語した。真っ裸の儘でも国防の利器を欲する情念や、何れ質種^{だね}を買い戻す構えは、習近平時代の「戦狼外交」の元祖らしい。誘導弾実験の初成功は大量窮死の信陽事件が発覚した直後で、「東風1号」は「共産風」制止の緊急指示の翌々日に高く付く朗報を齎した。

「12.2」鼓吹，「12.3」吹聴，「12.6」再定義

劉少奇は1957年の第2次訪ソで「東風」対「西風」の圧倒を確信した毛の壮語に従って、15年後に鉄鋼等重工業製品の生産高で英国に追いつき又は追い越すよう鼓吹した（12.2）。8年後の翌日に陳毅は日本の記者に外債の完済を吹聴し、「大躍進」・中ソ決裂以来の負の遺産の整理は終わったが、対ソ償還の1965・66年分も64年に繰り上げた意地は無益である。

14年後の「12.3」に歿した張国燾は毛の「功狗」と蔑んだ劉の死を大洋の対岸で見届け、

劉は毛と永訣した丸8年後の全人代総会初日の周の「四個現代化」再宣言を聞けなかった。毛も周等の非「文革」派の優勢を嫌う気分と病体衰弱の所為で大会に出席しなかったが、「四個現代化」は周・毛歿後も継承され、21世紀以来の通念では工業が再び首位を占めた。

鄧小平は大平正芳（日本首相、1910.3.12～80.6.12）との会見（1979.12.6）で、中国の現代化を「小康」（一応の余裕が有る）と規定した。毛の初訪ソ出発の丸30年後の再定義と関連する新思考は、10年前の国家負債を恥じる観念（林彪が「9大」政治報告で誇った内・外債とも無い国家の前年 [1968] 末実現）と反転して、西側の借款を活用して「東風」を助勢する様になった。

毛が転戦中の軽装に持ち続けた『三国志演義』（明の長篇小説、羅貫中 [元末～明初の文学者、1330頃～1400頃] 著）に、孫権（字仲謀、182～252、229～52 呉の初代皇帝）・劉備（字玄徳、161～223、221～23 蜀漢初代皇帝）連合軍の赤壁（現湖北赤壁市）の戦（208）の圧勝を導く奇謀として、諸葛亮（字孔明、劉の軍師→蜀漢の丞相、181～234）の「借東風」（東風を借りる）の物語が有る。

孔明は兵器獲得の為に濃霧を利用して攻撃を装い、易々と曹操（字孟徳、魏の始祖、155～220）の水軍に箭を10万本放たせた。神算に感服した周瑜（字公瑾、呉の武将、175～210）が戦法の相談に来た時、彼の提案で各々掌に書いて見比べ、何れも「火」で共に大笑いした。その後、敵の兵船・陣営を焼き払う準備が着々と進む中で、周は落し穴に気付いて吐血・失神した。

彼は見舞いに来た孔明に「人有旦夕禍福」（人に旦夕の禍福が有る）と感嘆し、「天有不測風雲」（天に不測の風雲が有る）と言われて呻いた。孔明はその胸の痞えを下ろす処方箋として、「欲破曹公、宜用火攻。万事俱備、只欠東風」（曹公を破らんと欲せば、宜しく火攻めを用うべし。万事俱備われども、只東風を欠く）と書き、見せた上で此が都督の病源でござると告げた。

孔明は冬に少なく作戦に不可欠な東南の大風を3日以内に天から借り受けると申し出、天書の秘伝で七星壇を築かせ11月20（旧暦、甲子の吉日）～22日（丙寅）に風を祭った。果せる哉、翌日の三更（一夜の五更中の3番目、夜11時～未明1時）に神風が激しく吹き出した。呉軍は直ちに進撃し火の船を敵陣に突入させ、数珠繋ぎで動けない大船群を全焼させた。

「万事俱備、只欠東風」は龍を画いて点睛を欠く事と似ているが、初代誘導弾の「東風」は西風を圧倒する東風の他に、赤壁の戦の天助拝借と通じる外力（ソ連の援助）借用の含みも連想される。「借東風」の「火攻」と「草船借箭」（草船にて箭を借る）の字面から、解放军の陸・空・海（成立順）3軍次ぐ第4の「火箭軍」（2015.12.31 発足）へと連想が飛ぶ。

国防部5院初代院長銭学森は米国から帰還した直後、1956年元日に将領への講義で「火箭軍」の重要性を説いた。ソ連戦略ロケット部隊（1959.12.17 党中央決定、60.1.14 設立）の中国版として、第2砲兵が建党45周年記念日に組成され（66.7.1）、銭提言60周年の前日に「兵種」（職種別軍隊、砲兵・海軍航空兵等）→「軍種」（軍の基幹構成、通常は陸・海・空軍）に昇格した。

銭学森は銭偉長（力学者・応用数学者、1912.10.9～2010.7.30）・銭三強（核物理学者、13.10.16～92.6.28）と共に、周恩来に重宝された科学界の「三銭」である。党中央・國務院・中央軍委

授章（1999.9.18）の「両弾一星功勳」（航空・宇宙航空/核兵器開発/国防科技の為に卓然たる貢献をした23人）の内、銭学森・三強は其々第1・2領域の各10人に入る。

銭三強は第3（核）機械工業部（1956.11.16人大常委会設立決定、58.2.11より第2）次官を務めたが、原爆初実験成功（51歳の誕生日）の3日後に河南の農村に派遣されて社会主義教育運動に従事した。「文革」中に同業者の妻何沢慧（1914.3.5～2011.6.20）と共に「反動的學術権威者」とされ、69年冬から陝西合陽県の「5.7」幹部学校で「思想再教育」労働を強いられた。

銭の父玄同（言語・文字学者、北京大学等教授、1887.9.12～1939.1.17）は、日本留学（06～10）中に章炳麟（号太炎、革命家・思想家・学者、69.1.12～36.6.14）に師事し、「5.4」新文化運動（16～21）で白話文・漢字改革を提唱し国語羅馬字発音表記を考案した。三強（第3子）は清華大学物理学部卒（36）後に渡仏し、キュリー夫妻門下で博士号を取り研究に従事した（37～48）。

第3回ノーベル物理学賞（1903）共同受賞者のピエール・キュリー（1859.5.15～1906.4.19）と妻マリ・キュリー（波蘭出身、67.11.7～34.7.4）は、化学者でもありノーベル化学賞（11）にも輝いた後者がより名高い。斯界最高の桂冠を2つ摘んだ唯一の女性科学者は史上最も世界に影響を与えた女性と見られ、生誕50周年時の露西亜10月革命と通じる重みがある。

娘（イレース・ジョリオ＝キュリー、原子物理学者、1897.9.12～1956.3.17）・婿（フレデリック・ジョリオ、同・平和活動家、00.3.19～58.8.14）も、彼女逝去の翌年ノーベル化学賞を得た。前者より丸10歳年上の銭玄同は子女に同業者が居ないが、三強の2女1男は皆科学者で、何（中国初の女性物理学博士・中国科学院院士〔国家学士院会員〕）は「中国のキュリー夫人」の美称がある。

何は同級生の夫より良い成績で首席卒業後、抗日志向から独逸で弾道学を研究し博士学位を獲った（1940）。結婚（1946）後のキュリー夫妻実験室在勤を経て帰国し、翌年からの中共治下で中国科学院原子能研究所副所長に就任した（64）が、同年・月・日生れの江青が推進する「文革」で人生が狂い、73年に漸く復帰し同高能物理研究所副所長と成った。

「2.28」弾圧, 「5.23」激動, 25人 vs. 8人

中国人/系ノーベル賞受賞者の内、1957年物理学賞の楊振寧（1922.10.1〔旅券上は9.22〕、合肥生、45年渡米、64年帰化、2015年国籍返上・中華人民共和国〔01年より永住〕国籍取得）・李政道（26.11.24、蘇州生、同46・62）、76年同賞の丁肇中（36.1.27、米国生）に続く86年化学賞の李遠哲（36.11.19、台湾新竹生、同62・74、94年帰台・市民権変更）は、キュリー夫人の影響で化学者を志した。

李は（中華民国）中央研究院院長（1994～2006）在任中、民主進歩党（86.9.28結成）党首の陳水扁（50.10.12〔戸籍上は出生届提出日の51.2.18〕生）の總統当選（00～08、2期）に寄与した。次の1998年物理学賞の朱棣文は、「2.28事件」（47年、民衆の反国民党暴動と当局の武力弾圧）1周年時に米国で生れ、オバマ（61.8.4生）政権（2009～17）1期目にエネルギー長官を務めた。

翌年同賞の崔琦は9年前の同日(1939.2.28)に河南宝豊県で生れ、51年に独りで香港に移住し、奨学金で渡米し58年に大学に進んだ。翌年に父長生(驢馬に由る運搬や石炭販売を営む農民)は餓死し、母王双賢は「裡通外国」の冤罪を蒙って1968年に窮死した(俱に歿年未詳)。彼は若し自由世界へ行かず大陸に残るなら、共斃れに成らなくても輝く業績は期待し難い。

2008年化学賞の^{ロジャー・Y・チエン}銭永健(1952.2.1~16.8.24)は米国生れで、^{きよ}銭学森(父学築[空気力学専門家、14~97]の従弟)の影響で生化学者に成り、自転車走行中急死の丸50年前の老舎・李達致死の「紅色恐怖」と無縁である。チャルフィー(化学者、1947.1.15生)・下村侑(生物学者、28.8.27~2018.10.19)との同時受賞は、自然科学分野の米・日対中国(人/系)格差を思わせる。

日本勢は中共建国の翌月の物理学賞(湯川秀樹[1907.1.23~81.9.8])を始め、60年目の2008年には史上最多の4人(他に物理学賞総嘗めの南部陽一郎[21.11.8~2015.7.5、70年米国帰化]・小林誠[44.4.7生]・益川敏英[40.2.7~21.7.23])を含めて13人と成った。中国勢の華人6名・本土籍0は大きく見劣りし、海外研究・居住歴が長くても略全員が自国籍を持つ日本勢と対照を成す。

2009年物理学賞の^{チャールズ・クエン・カオ}高錕(1933.11.4~2018.9.23、江蘇金山県[58年上海に編入]生)も、48年から台湾・香港への移住を経て英国→(英領/中国)香港を生活・研究拠点とし、英・米の国籍を有する。2015年生理学・医学賞の^{ゆうゆう}屠呦呦(薬学者、1930.12.30、寧波生)は、本土で教育を受け且つ研究を続ける生粋の中国人として自然科学分野の同賞初受賞に輝いた。

「3無」(大学以上の学歴も、海外進学・研究経験も、中国科学院/研究所所属歴も無し)の彼女は、1972年に葉草から抽出・合成・調剤し国内外の多くの人命を救った^{マラリア}抗瘧薬が殊勲である。越南戦争(1961.12~75.4.30)中の対越南民主共和国(45.9.2成立)支援の一環として、毛の指示で立ち上げた^{プロジェクト}「523項目」(67.5.23発足)の新薬開発が望外の収穫の契機である。

9・1年前の「大躍進」発動・「彭羅陸楊」要職解任と日が重なる事業の開始から、3年大飢饉の大量餓死を横目に続行された巨額の対外援助が思い起される。国難の真っ最中に出来た初代誘導弾「1059」は強力殺虫剤の名称でもあり、改称の「^{D F}東風-1」も「東方無産階級」制覇の戦闘的な性格を秘めるが、国民の犠牲を代償とする対越救援は後に裏切られた。

知識人は「文革」中「黒九類」(黒い[反動的]9種類の人、地主・富農・反革命分子・悪質分子・右派分子・^{うらざりもの}叛徒・^{スパイ}特務・資本主義の道を歩む実権派・知識人)の末席に置かれ、「臭老九」(9番目の^{つま}鼻撮み者)の蔑称で呼ばれた。労働者(「指導的階級」)・農民(「革命の同盟軍」)・軍人(政権維持の主力)の軍人・革命的幹部と対等に成れず、下級階層として長らく差別を受けた。

元(1271~1368)の階層でも儒者は娼妓と乞食の間の9番目に在り(趙翼[清の歴史家・文学者、1727~1814]著『^{がい せう}陔余叢考」[1790]に見える「元制、一官、二吏、三僧、四道、五医、六工、七匠、八娼、九儒、十丐」)、蒙古帝国の拡張で中国を征服した異邦族の王朝の始・終の7・6世紀後の「文革」中に、同じ「工(人階級)」の下位に在る「臭老九」は知識人の自虐・自嘲の含みも有る。

中国中医(漢方医学)研究院勤務(研究員昇進[1980]前)の屠呦呦の^{アルテミシニン}「青蒿素」発見の翌年、

職位に近い陳景潤（中国科学院数学研究所助理研究員 [講師格]，33.5.22～96.3.19）は「陳氏定理」（66年首唱）を基に、ゴールドバッハ（^{フロイセン}普魯西の数学者，1690.3.18～1764.11.20）の偶数に関する予想（露外務省入省の42年）の証明を発表し（73.4），難題解決の突破で国際的な反響を呼んだ。

江青は陳の居住・研究環境の劣悪と病気（腹膜結核）の重症を記す内部報道を読んで涙を零し，夫君への関与要請で治療（一説に救命）最優先を建議し同意を得た。側近の遼群（國務院科技組副組長 [次官格]・清華大学党委書記兼革委會主任，1932～99）に，刻苦研鑽の精神・成果は大いに表彰す当きなのに，生存の最小限の条件すら備わらぬ境遇は不憫だと言った。

革命と建設は知識人を抜きにしては成功も維持も出来ないという言葉を引きいて，主席は一貫して知識人を尊重すると江は説いた。毛の「老九不能走」（老九を行かしむ可からず）は知識人を9位に置くと誤解されるが，革命模範京劇『智取威虎山』（智もて威虎山取る）の主人公（「偵察英雄」楊子榮）を指し，故に知識人を英雄・主人公に譬えるのが本意だ，と語った。

毛は最後に出る政治局会議（1975.5.3）で，教育・科学・文芸・報道・医務の各界は知識人が多く，中には好い人も少しマルクス＝レーニン主義的な人も居るとし，外交部も知識人の塊で，（列席の側近）王海容（次官，1938.9.25～2017.9.9）・唐聞生（米州・大洋州司 [局] 副司長，43.3生）も「臭知識分子」「臭老九」だが，「老九不能走」と7年前に言った冗句を繰り返した。

江は毛の芝居の台詞の転用を美化して解釈したが，陳の窮境に同情し涙も出た事は無慈悲の彼女には珍しい。殊勲者を危急から救う希求が通って，陳は即座に要人並みの医療を受けた。科学振興の英雄と成った陳は「文革」後に破格の研究員昇進（1977），国家自然科学1等賞受賞（84）を果し，歿後に肖像・独創数式が「国家の名刺」たる記念切手に登場した（99）。

屠は世紀の発見の35年後（2007）も無名・貧寒で，世界の頂点で脚光を浴びた後も中国人科学者のノーベル賞受賞は無い。最後の華人受賞（7人目）の翌年から，日本は2010年化学賞（2人），12年生理学・医学賞，14年物理学賞（3人），15年生理学・医学賞と物理学賞，16・18年生理学・医学賞，19年化学賞，21年物理学賞，と年平均1人で豊作が続いた。

2014・21年物理学賞の中村修二（電子工学技術者・研究者，1954.5.22生）・眞鍋淑郎（地球学者，同31.9.21）は，其々05・58年に米国国籍を取得し日本国籍を失った。日系は1949～2002年の9名中0→08～21年の16名中3名で「脱日入米」の傾向を見せるが，総数25名対華人・中国人8名は日本の優位を示し，華人大半・日系全員の米国縁は米国の魅力を物語る。

「9.8」弔辞，「8.28」終焉，「9.3」理想

日本勢最多量産年組の益川敏英の逝去日は中共「1大」開幕100周年に当り，建党後第2の100年の内この指標で日本に追いつき追い越すのは何時に成ろう。初の科技発展長期計画（1956～67）は5年倒しで完成した半面，2年目の「反右」から「文革」まで大勢の知識

人が迫害され、起点の59年後の初ノーベル賞受賞の様に人材形成の空白・断層が大きい。

「三銭」中の銭偉長は清華大学副学長在任中「右派」にされ、後14年も肉体労働をさせられた。1972年に周恩来は英国・瑞典・加奈陀・米国訪問の科学者代表団に彼を加えたが、亡命の懸念で拒否した団長の交代後も後任に反対された。周は出発前日に彼を呼ぶ時に初めて首都製鉄所に下放された事を知り、何の準備も無い彼に自分の靴を与えて間に合せた。

党外識者（後1984年に民盟副主席）の彼と一線を劃す様に、銭学森は「最も悪辣で残忍な政治的野心家」と糾弾した。銭三強は農村社会主義教育運動への参加と「文革」中の強制労働で研究が中断し、知識人に対する「又紅又專」（革命的で専門的技能も持つ）と「紅」第1の要求は、陳景潤が「文革」中「白專」（非革命的専門馬鹿）の批判で畏縮した程の呪縛を成した。

鄧小平は1975年8月3日に国防工業の整頓に関する講話で毛の「老九不能走」を盾に、「老九」と呼ばれた科学・技術に携わる人を重視せよと唱えた。国防工業は「四個現代化」中の工業・国防と科学技術に跨り、大飢饉の国難期にも最重点として生活・警備等で厚遇されただけに、「文革」末期に「臭老九」の不名誉を打ち消す必要性は「原罪」の深さを示す。

「兩彈一星功勳」23人の内7人が「追授」（歿後授与）で、中に王淦昌（核物理学者、1978年核工業部次官兼原子能研究所所長、07.5.28～98.12.10）・銭三強・銭驥（気象物理学・気象学者、7機部第5研究院衛星総体設計室主任等、17.12.27～83.8.28）・鄧稼先（理論物理・核物理学者、79年核工業部第9研究院院長、24.6.25～86.7.29）の4人（年齢順）が病歿した（歿年91・78・65・62）。

受章後他界の14人は全て第2（最後）の厄年（84歳〔満年齢又は数え歳〕）を超え（長寿順で101・100・97・96・95・94・93・92〔2人〕・91〔2人〕・90・86〔2人〕・84）で、中共「1大」4日目（1921.7.26）に生れた王希季（白族、衛星帰還技術専門家、航天工業部総設計師等）、孫家棟（人工衛星専門家、第5研究院院長・航天/航空航天工業部次官等、29.4.8生）は、100・93歳の超高齢で存命中である。

最短命の病歿後授与者の鄧は国防科工委科技委副主任を拝命した翌々月に直腸癌で歿し、長期の放射能被曝や事故（核爆弾投下実験失敗〔1979〕後「^{フルトニウム}鈾」と接触）に由る健康の毀損が大きい。歿後授与の郭永懷（流体力学者、2機部第9研究院副院長、1909.4.4～68.12.5）は飛行機事故に遭い、墜落時に水爆実験の最新資料を守る当く警護と抱き合っ間に挟んだ儘で殉職した。

「人は何れ死ぬ。但し死の意義は様々である。古代中国の司馬遷という文学者は言った。「人には固より一死が有るが、或いは泰山よりも重く、或いは鴻毛よりも軽い。」人民の利益の為に死ぬのは、泰山よりも重い。」毛の『人民に奉仕する』（1944.9.8）の名言（胡喬木の加筆）を体現した郭の犠牲は、国防科技分野3人中唯一の「革命烈士」称号で顕彰される。

毛は任務執行中に事故死した張思徳（中央警備団〔連隊〕の兵士、朱徳の同郷〔四川儀隴県〕、1915.4.19～44.9.5）の追悼会で、又「奮闘すれば犠牲が付き物で、人が死ぬ事は常に生じる。然し我々は人民の利益に考え到り、大多数の人民の苦痛に考え到るなら、人民の為に死ぬのは、死に場所を得たのである」と述べ、張は人民の利益の為に死にその死は泰山よりも重いとした。

「烈士」姚桐斌（誘導弾・宇宙飛行材料専門家、第5研究院材料・工藝研究所所長、1922.9.3～68.6.8）は、宇宙航空・航空分野の最精鋭なのに造反派に撲殺され時期・歿年とも一番の早逝に成った。同じ歿後授与の趙九章（地球物理学・気象学者、中国科学院地球物理研究所所長等、1907.10.15～68.10.26）も、「文革」の迫害で同院1級研究員（1〔最上〕級教授格）同年自殺の20人に入る。

ゲーテ（独逸の詩人・作家、1749.8.28～1832.3.22）の詩劇『ファウスト』（2部、08・33）に、「人間は努力する限り迷う者だ」という金言が有り、毛も犠牲覚悟の奮闘で迷走が多かった。上記の犠牲不可避論に「只、我々は出来る限り不必要な犠牲を減らす当きだ」と付言したが、晩年の頑迷で党・国・民に強いた謂れ無い犠牲は許容範囲を超え窮まり無い迷惑である。

郭永懷は「人有旦夕禍福」の通り、青海から帰京の着陸直前の発動機故障で命を落した。当日61歳と成った林彪の後の墜落死も空路の危険性を再認識させた。非正常死亡第1号の「68.6.8」は賀龍迫害死の「69.6.9」を連想させ、「吉祥数」複合の68は3人が立て続けに非業・不慮の死を遂げた西暦年の下2桁と為り、林の誕生日と通じた呪いを感じさせる。

錢驥は上司の趙九章の憤死と違って隠忍で凌辱を凌ぎ「文革」後まで生き延びたが、歿年65の逝去は「10大」閉幕10周年に当る。中共建国の200年前のゲーテ生誕と重なる「8.28」に、毛は奮闘・迷走と林彪事変の打撃で消耗し切って、閉会時に自力で立ち上がれず、異例にも代表を退席させてから椅子毎に運び出され、以降1度も人民大会堂を訪れなかった。

71歳と成った翌日の周恩来・顧毓琇会見に陪席した周培源（理論物理学者、1902.8.28～93.11.24）は、学界の重鎮（78年北京大學学長、80年中国科学技術協会〔58.9.23成立〕主席）である。中共入党（1959）後も九三学社（44.11民主科学座談会発足、45.9.3九三座談会に改称、46.5.4再改称）の要職に居り（87年第2代主席）、与党と衛星党派（序列が全8の内7位）の主従一体を現す。

鄧稼先も中共（1956年入党）中央委員（82年当選）と学社の同職（時期未詳）を務め、妻許鹿希（北京医学院教授、28.8.11生）の父徳珩（政治活動家・社会家者、水産相・全人代副委員長・全国政協副主席、1890.10.17～90.2.8）も、学社主席在任中の79年に中共に加わった。他方、「兩彈一星功勳」者5人（21.5%）が社員だから、「高（上）級」知識人中心の同社の高い知力が分る。

程開甲（物理学者、核実験基地研究所所長・副司令、1918.8.3～2018.11.17）は入社→入党し（53・56）、陳芳允（電子工学者、人工衛星測量技術責任者、16.4.3～00.4.29）も同様（51・77）で、陳と同期の趙九章（後に中央常委）も迫害死を免れたなら入党・入隊（程・陳は共に76）が予想される。学社要職（最終＝1997年名誉主席）者の王淦昌も、改革・開放元年に許主席と共に入党した。

国防科技分野の3人中2人の誕生日が続き（陳の4.3と7歳上の郭の4.4）、23人中12月生れの7人の内2組の誕生日一致が有り、任新民（ロケット発動機専門家、人工衛星総設計師・7機部次官・航天工業部科技委主任、大佐、1915.12.5～2017.2.12）・屠守鐸（ロケット・構造強度技術専門家、7機部総設計師、17.12.5～12.12.15）の方は、郭の命日と重なり生死相隣の宿命を思わせる。

核兵器開発10人中の朱光亜（核物理学者、中国工程院院長兼党組書記・中央委員・全国政協副主

席，1915.12.25～2011.2.26）・呉自良（材料学者，上海冶金研究所副所長，17.12.25～08.5.24）は，航天・航空10人中の任・屠と対を成し生年も其々同じで，朱は王大珩（光学者，長春光学精密機械学院院長・哈爾濱科学技術大学学長，15.2.26～11.7.21）と生歿年が一緒に命日が誕生日と重なる。

45歳時に虐殺された姚桐斌の誕生日（9.3）は，民主科学座談会→九三座談会の改称の由来（抗日戦争・第2次大戦勝利）を連想させる。終戦翌年の九三学社の発足は「5.4運動」27周年記念日に当たるが，祖形・前身の名称中の民主・科学は10年後から破壊された。更に10～20年後の「文革」中は人命抹殺まで激化し，最尖端・最上級の科学者・専門家も受難した。

「8.30」救済，「4.20」総統選，「4.21」総攻撃

2機部9院221廠^{しょう}（核兵器開発基地，青海）の動乱は姚の死後も続き，趙登程（国防科工委工作組副組長，元空8軍副軍長，空軍大佐，1920～？）が進めた肅清で，英/露語が出来る者を米/ソの間諜とする冤罪が多発し，銭晋（爆薬専門家，第2生産部主任・副教授，1920～70）が撲殺された（趙は中央專案審査小組・公安部等の要職在任中の迫害行為に由り，83年に懲役15年に処された）。

キッシンジャー（政治学者・政治家，国家安全保障問題担当大統領補佐官〔後國務長官〕，1923.5.27生）秘密訪中（71.7.9～11）の電撃発表の日（15），楊振寧が帰省の査証^{ビザ}を取得し，4日後に巴里から発った。周恩来は5時間に及ぶ会見・宴会で礼遇し米国の事情を訊ね（8.4），彼が最も再会を望む鄧稼先を青海から呼び寄せたが，統戦工作の配慮で221廠の専門家が救われた。

「兩彈一星功勳」受章の于敏（「中国の水爆の父」たる核物理学者，2機部9院/中国工程物理研究院副院長等，1926.8.16～2019.1.16）・陳能寬（材料科学・工程専門家，中国科学院物理/金属研究院研究員，核工業部/国防科工委科技委副主任，23.4.28～16.5.27）等も，併せて危険を脱した。陳がキッシンジャーの93歳の誕生日に歿した巡り合せは，米中接近→楊訪中→鄧等保護の展開に合う。

ニクソン訪中を告げる共同声明は，1927・87年「7.15」の国共決裂・台湾戒嚴令解除と共に歴史の転換点である。「兩彈一星功勳」授章の「9.18」は，1958・76年の中国科技協会「1大」開幕・毛沢東追悼大会の日に当たる。満州事変（奉天の鉄道爆破事件を契機とする日本の中国東北侵略戦争，1931.9.18）と結び付ければ，国難^{バネ}を發条にする強盛志向が改めて感じ取れる。

毛が「地球籍」維持の為の米国への超越を唱え（1956.8.30），2年後に北戴河会議で妄想の目標を決めたが，更に15年後の10期1中全会から病弱の所為で全会を欠席した。周は「10大」閉幕と1中全会の間を縫って顧毓琇と会い，獄中の王昆侖の境遇改善に関する陳情を受け対応を承諾したが，「文革」初年の「8.29・30」も著名人の嘆願と彼の救助が有った。

銭学森は7機部次官就任の翌年に「文革」襲来に遭い，国防科技の高位「關鍵人物」^{キー・パースン}であるが故に難を逃れた。「4旧」打破の「紅色恐怖」の1句（1966年8月下旬）の終盤に，章士釗（文人政治家，中央文史館館長，1881.3.20～1973.7.1）が毛沢東に家宅捜査の被害を訴えた。

毛の要保護の指示（翌30日）を受けて周恩来は対象者名簿を作成し、銭も中に含まれた。

その「宋慶齡 郭沫若 章士釗 程潜 何香凝 傅作義 張治中 邵力子 蔣光鼐 蔡廷鍇 沙千里 張奚若 / (1) (全人代) 副委員長、人大常（務）委（員）、（国家）副主席 / (2) 部長（大臣）、副部長（次官） / (3)（全国）政（協）副（主席） / (4) 国（務院）副（総理） / (5) 各民主党派負責人（責任者） / (6) 兩高（最高人民法院院長・最高人民檢察院檢察長）」に、後日「李宗仁」が追加された。

総勢610人（失脚者除外）の内に冒頭の12人中1位の宋は(1)の国家副主席、2・4・5・7位の郭（文学者・学者・社会活動家、1892.11.16~1978.6.12）・程（82.3.31~68.4.5）・何（78.6.27~72.9.1）・張治中（90.10.27~69.4.10）は同範疇^{カテゴリー}の副委員長（当選時18人中5・12・6・12位）である。同類の民主人士（6・7位）黄炎培・陳叔通は、当選1年の前後に歿し加害が及ばない。

6・9・11位の傅作義（初代水利相→同水利電力相、1895.6.27~1974.4.19）・蔣光鼐^{だい}（同紡績工業相、88.12.17~67.6.8）・沙千里（同地方工業相→軽工業相→食糧相、01~82.4.26）、12位の張奚若（教育相→同対外文化連絡委員会主任）は閣僚、10位の蔡廷鍇（同国家体委第1副主任、92.4.15~68.4.25）は筆頭次官で、共に(2)の48省庁の長と次官（400人）の内の特殊厚遇を受けた。

3・8位の章士釗・邵力子（1882.12.7~1967.12.25）は(1)の全人代常務委員（96人）で、段祺瑞政府の司法総長兼教育総長等を務めた章は、毛・中共に恩義が有り（20年に毛の活動資金募集に協力し、鄧小平等の渡仏苦学を斡旋）、民国の甘肅・陝西省主席と駐ソ大使を歴任した邵も、中共と古い縁を持つ（20年5・8月にマルクス主義研究会・上海共産主義小組を共同創設）。

李宗仁（新桂 [広西] 系軍閥・党派閥首領、陸軍1級上將、1891.8.13~1969.1.30）は、副総統（1人制）在任中に蒋介石下野後の総統を代理し（1949.1.21就任）、国民党敗退後に離職して香港経由で渡米し（12.5）、失意の晩年に^{パキスタン}巴基斯坦経由で帰国した（65.7.20）。張治中と邵力子・章士釗は彼が派遣した和平談判（4.1~20）の団長と代表で、決裂後に中共に身を寄せたのである。

『中華民国憲法』（制憲国民大会1946.12.25採択、47.1.1国民政府公布、同年12.25実施）に拠り、第1期国民大会第1回会議（48.3.29~5.1）で初代総統・副総統選挙が行われた。出来競争^{レース}の総統選（4.20）は蒋介石2430票 vs. 居正（司法院院長、1876.11.8~1951.11.23）269票（90.03%対9.97%）で即決したが、副総統選挙第1回投票（23）は6人混戦・過半数得票無し^{もつ}で纏れた。

蔣が応援した孫科（政府副主席、1891.10.20~1973.9.13）の559票は、3・4位の程潜（湖南省主席、陸軍1級上將）522票・于右任（前監察院院長、79.4.11~64.11.10）493票を超えたものの、李宗仁の754票に大差を付けられた。3人に絞った第2・3回（24・28）も順位が変わらず、上位2者決戦（29）は程側の票を得た李の勝ち（52.62%の1438票対47.38%の1295票）である。

程は24日に蔣の要請で出馬を止め、李は「以退為進」（退を以て進と為す）の策略で翌日に身を引き、孫は居辛くなり同日に断念を表明した。差額選挙の体裁を保つ仕切り直しの結果、反対勢力の連携で蔣の意中の人が落ちた。蔣を激怒させた李は程と共に蔣下野・国共和議を促し、程は陳明仁（第1兵団司令、中將、1903.4.7~74.5.21）と共に長沙で中共に寝返りした（8.4）。

程は「和平起義（蜂起）」の功勞に由り、湖南軍政委員会主席 / 省長（1949～50/52～66）・国家国防委員会副主席（54～56、59～66）等を歴任した。彼は蔡廷鍇・張治中と並ぶ国民党革命委員会（1948.1.1 成立）第3～4 期中央副主席（56～79）で、初代以来の蔡に次いで2 期目の同職に蔣光鼐・邵力子も居り、最大民主党派の5 要人は俱に「8.30」保護対象と成った。

中華民国の五権（世界の主流と成る三権 + 公務員採用・監督権）分立に基づく5 院（行政 / 立法 / 司法 / 考試 / 監察院）制の歴史上、副總統選の最終敗者は唯一の複数担当（行政 [1948～49]・立法 [48]・考試 [66～73] 院長）経験者である。首相・国会議長・人事院総裁に当る3 役を務めた国父の第1 子・長男で、巡り巡って民革初代名誉主席（1948.1～49.1）の宋慶齡と繋がる。

孫文臨時大統領（1912.1.1～12.4.1）の妻（1885.5.26 結婚）盧慕貞（67.7.30～52.9.7）は国母に当るが、纏足の旧式婦女と元首・党首（中華革命党、14.7.8 東京にて成立）との資質の懸隔で離婚に至り、直後（15.10.25）に孫は英文秘書の宋慶齡と再婚した。「2035 暗号」と関連付けられた「10.25」は1915 年のこの件や、45 年の台湾の民国への編入と結び付いても興味深い。

總統選の丸1 年後（1949.4.20）、行政院長何応欽（1 級上將、1890.4.2～87.10.21）が中共の和平協定案を拒否し、翌日に解放軍が長江の天險を突破し敵への総攻撃を始めた。怒濤の快進撃で国民党軍が雪崩^{なだれ}の様^{なだれ}に潰滅し、国民政府の台北移転宣言（12.7）と蒋介石の脱出（成都より、同10）で、中共政権の大陸支配の拡大・強化と逆の島国死守の縮小・弱体化が進んだ。

民国史上初の国会議員直接選挙は国民党全土統治の末期（1947.11.21～23）に行われ、5 ヶ月後の總統・副總統選（国民大会代表投票に由る間接選挙）は全中国の唯一の例と成り、台湾海峡兩岸の選民が参加する元首の差額選挙も史上1 回しか無い。蔣の対抗馬が虚飾と雖も1 割の票を獲り、蔣の意に反する副總統が当選した事は、中共治下に無い民主の所産と言える。

〔9.25〕大捷，〔3.2〕誤射，〔9.16〕輪禍

中国の憲法所定の国家主席・副主席は中共の内定と全人代の等額選挙に由り、主席は初代（1 期）の毛沢東（党主席）、次（2 期末満）の劉少奇（同第1 副主席）、復位後の同1 期の李先念（前同副主席・現政治局常委）・楊尚昆（前政治局委員・現軍委常務→第1 副主席）、江沢民・胡锦涛（各2 期）・習近平（3 期予定）が総書記兼務で、他の所属や党内の他の人選も有り得ない。

副主席は毛主席時代の朱德（党副主席）、劉主席時代の宋慶齡・董必武（政治局委員）、李 / 楊主席時代の烏蘭夫（同） / 王震（元同・前中央顧問委員会副主任、上將5 位、1908.4.11～93.3.12）と続いた。董は就任の11 年前の副總統立候補者居正と同じ元最高法院院長であるが、烏・王は両主席（大將格の軍事家）に似合う上將で、初代と同じく銃から生れた政権の性質を物語る。

劉少奇は毛の『炮打司令部』執筆日の贊比亚^{ザンビア}友好代表団との会見が最後の主席執務と成り、解任前後に董が事実上の代理を務めた。毛は差額選挙を許す雅量どころか林彪抑制の為に

廃止し、憲法改正（1975.1.17）に由る空席は8年弱に及んだ。再改正（1982.12.4）で復活した1期目（83.6.18～88.4.8）は、首・尾が其々48・42年前の瞿秋白・葉挺等の死歿と重なる。

第6期全人代第1次会議（1983.6.6～21）の当初に、国家主席・副主席の単一候補者として、李先念・廖承志（政治局委員・全人代副委員長・國務院華僑/港澳事務辦公室主任、1908.9.25生）が推薦された。「楽極生悲」（楽しみ極まりて悲しみ生ず）や「人有旦夕禍福」と言う様に、廖は「六六大（いに）順（調）」の「重慶」吉日の4日後の明け方（5時22分）に急逝した。

彼の対日工作と華僑・香港澳門事務の重鎮は「文革」中「監護」（1967.2～70.10）審査を受け、周恩来の配慮で心臓病を理由に69年の「5.7幹校」行き・強制労働が免除されたが、解除直後に発作が起き、翌々年の中日国交正常化交渉でも重荷を抱えていた。今度は冠動脈障害^バ血管迂回側管手術^バの成功（1982.3）で大任を迎えたが、目前に時限爆弾が炸裂した。

第1厄年（73歳）を過ぎた後に悲運が襲った彼は、要人の中で強運に恵まれた事が多い。紅4方面軍総政治部秘書長在任中に肅清対象として逮捕され（1934.12）、手錠が掛った儘で長征に参加した後に党籍永久剥奪の処分を受け（35.12）、周恩来の交渉で釈放・名誉回復と成った（36.10・12）が、周が同時に生命の保全を強く主張した曾中生は前年夏に殺害された。

廖は郭潜（南方工作委員会組織部長、1909.10.26～84.8.4）の裏切りで国民党に捕まり（42.5.30）、中共が政治協商会議（46.1.10～31）で彼と葉挺の釈放を求めた結果22日に出獄した。葉は俘虜の馬法五（40軍軍長、中將、1894.10.23～1992.1.24）と交換して自由の身に成った（3.4）が、銭学森と朝鮮戦争俘虜の米軍操縦士^{パイロット}の交換に次ぐ収益は、不慮の「4.8空難」で吹っ飛んだ。

73歳時に米国のスタンフォード大学医科大学院で受けた心臓手術も無事に終り、72歳の羅瑞卿の異邦（西独のハイデルベルク大学病院）での施術後急死の轍を踏まなかった。羅と違って権力中枢の危険性の高い要職に居ないから「文革」の被害は命取りに成らず、改革・開放期まで生き延びた事も幸運が幸運を呼ぶ様に羅と海外治療の明暗を分けた。

羅は自殺に因る左足の不自由を治そうと腹を括って出国した（1978.7.18）が、鎮国時代の終焉前の秘密主義と偽装・隠蔽工作の伝統から変名を使い心臓の持病も伏せた。整形外科の手術（8.2午前）は上手く行き、術後に普通に歩ける様に成ったが、付き添い不可の一般病室と言葉が通じない状況の中で、翌日未明2時40分に心筋梗塞で無念の客死を遂げた。

羅の訃報（新華社8.8、8期11中全会「文革」決議の12周年）は、心臓病の治療「無効」（効果無し）に由る不幸な逝去を告げ、死亡時刻を北京時間（9時40分）に直した。遺体帰国・告別式（10・11）後の追悼大会（12、同全会・「10大」閉幕12・1周年）の弔辞で、鄧小平は前出時刻での「心臓停止了跳動」（心臓の搏動が止った）としか述べず、死亡の経緯を開示しなかった。

不都合な真実を明かさない結果、『辞海』1979・89年版の「羅瑞卿」の項目は、要人は首都に死すという固定観念から、公式報道に無い「在北京病逝」（北京にて病没）と記し、歿21年後の99年版で漸く死去関連の記述が消えた。『孫子』（中国最古の兵法書）は詭道を「兵」

（軍事。戦争）の真髄としたが、敵や外部と共に味方・内部をも騙すのは究極の欺瞞である。

黄克誠に次ぐ軍委秘書長の失脚は文字通り片足の半分を失い（膝以下切除）、再任（1977.8.19）後1年未満で命まで喪ったのは不吉な宿命を思わせる。廖承志の当選直前の不運も国家正・副主席を巡る先代の政争の祟りが感じられるが、戦争時代に死線を潜った2人とも無自覚の未明に黄泉へ赴く不可抗力は、閻魔が呼ばなくても自分で行く73歳の鬼門の靈験か。

廖の父仲愷（^{がい}国民党元勳、中央常委・広州政府財政相等歴任）は容共左派の指導者で、反共右派の差し金に由る暗殺で斃れた（1877.4.23～1925.8.20）。長女（第2子・長男承志の姉）夢醒（1904.2.7～88.1.7）の夫李少石（8路軍駐重慶辦事処〔事務所〕秘書）は、20年後の国共重慶談判（8.29～10.10）の終り頃、国民党兵の銃弾で岳父よりも9歳短い命を奪われた（06.7.6～45.10.8）。

抗日戦争終結時の蒋介石の国民政府対中共辺区政府談判の要請（1945.8.14・20・22）に由り、毛沢東・周恩来・王若飛が28日に米軍機で延安から「陪都」（臨時首都）重慶へ飛んだ（国府の張治中・ハーリー〔米国大使、1883.1.8～1963.7.30〕同乗）。43日間に亘る交渉の末『政府と中共代表の会談紀要』が調印され、「双十（建国記念日）協定」で内戦回避・政治協商の道が開けた。

虎穴に乗り込んだ毛の安全に神経を尖らす周は、自分の英文秘書が自分の公用車の中で銃撃されたと聞いて、本能的に蒋介石と対立した廖仲愷を思い起し国民党の陰謀を疑った。調査で判明した真相は、猛烈運転で兵隊をぶつけて重傷を負わせ、傍の仲間が怒って発砲した事である。偶発事故として穏便に処理されたが、当事者の非で李は謂れ無い犠牲を蒙った。

柳亜子（詩人、1887.5.26～1958.6.21）の8路軍駐在事務所への訪問が発端で、元国民党左派（皖南事変後「中央への誹謗」で監察委員解任・党籍剥奪）の彼は、前日に毛から詞（^{うた}長短揃いの定型古典詩歌）『沁園春・雪』を披露して貰った余韻に浸り、帰宅の際に詩友の李を同乗させ、韻事の談義を楽しんだ後に降りたが、予定（毛への出迎え）を急ぐ帰り道に悲劇が起きた。

林彪は8路軍115師を指揮して平型関（山西靈丘県）大捷（1937.9.25）を収め、板垣征四郎（翌年より陸軍大臣・朝鮮軍司令等、41年大将、1885.1.21～48.12.23〔A級戦犯処刑〕）の第5軍団の千人を殲滅した戦果は、中国の抗戦の初勝利と成る。勇名を上げた彼は1938年3月2日に、山西隰県で戦利品の軍馬に騎って進軍中、国民党軍に日本軍と誤認され誤射で負傷した。

その友軍の総帥閻錫山（第2戦区司令、1級上将、1883.10.8～1960.5.23）は、北洋軍閥晋系首領時代から民国元～38年（49）に山西を支配し（民国史上存続最長の軍閥）、国民党大陸時代の最後の行政院長として李宗仁総統代理が放棄した職務を代理した。彼は発砲した兵士の処刑で償おうと考えたが、林は7年後の周の李少石事件の寛大処理と同じく不問を要請した。

衛立煌（第2戦区副司令、上将、1897.2.16～1960.1.17）は延安まで見舞いに行き、慰問の^{しるし}徴に銃弾100万発・手榴弾25万個・牛肉缶詰180箱を供与した。怪我の補償で弾薬不足の8路軍は望外の補給を得たが、神経等の損傷で心身とも打撃が大きい林の戦歴・政治人生に陰影を落し、治療の契機で染まった鴉片常用を告発した傅連璋の30年後の迫害死にも繋がる。

元帥 10 人中の負傷経験者は劉伯承と林しか居ないが、国・共の党首・軍統帥の蔣・毛とも無傷ながら、蔣は 82 歳と成る前月に輪禍に遭った (1969.9.16)。先導車が前方の某師団長の車の無謀運転を回避する為に急停止した処、彼の運転手の誤操作で加速・衝突した。我が天下に障碍無し^{ベルト}の無防備で安全帯も着用しない故、心臓等が傷害を受け寿命が縮まった。

国防次官逝去第 1 号の陳賡大將 (歿年 58) より、同じ心臓病が死因と為る廖承志は 15 歳長生きしたが、閣僚級要人の通常の長寿傾向と照らせば短命に近く急逝の衝撃も大きい。急遽充てられた副主席の烏蘭夫は蒙古族の政治局委員・前統戦部長で、後任の王震は中日友好協会名誉会長として廖 (元会長) と繋がるが、人選の妙が有る人事は政治局の決定に由る。

「12.4」昇格, 「5.24」封切, 「7.17」溺死

廖の誕生日「9.25」は満 29 歳時の平型関大捷で歴史に特筆され、官製毛沢東伝 (建国後篇) でも冒頭の「6.15」新政協議準備会に於ける演説, 「10.1」中央人民政府委員会第 1 回会議に続いて、正文の 2 頁目の開国大典・毛の建国宣言・国旗掲揚式の描写の後, 「9.25」座談会 (国旗・国章・国歌・紀年・国都問題の意見交換, 中南海豊沢園 [毛邸] にて) が詳述してある。

16 人中の中共勢は招集者の毛・周恩来、要人の李立三 (建国時労働相) と文芸家の田漢 (劇作家・戯劇活動家・詩人, 1898.3.12~1968.12.10)・呂驥^{りよき} (音楽評論家・作曲家・音楽活動家, 09~2002.1.5)・賀綠汀 (作曲家・音楽教育家・音楽理論家, 03.7.20~99.4.27) で、歿後に創設成員と追認された沈雁氷, 10 年後入党の梁思成 (建築学者, 01.4.20~72.1.9) を含めても半数しか無い。

終身非中共の 10 人は、郭沫若・黄炎培・陳嘉庚 (愛国華僑領袖, 1874.10.21~1961.8.12)・張奚若・馬叙倫 (教育家・言語文字学者, 85.4.27~70.5.4)・徐悲鴻 (画家・美術教育家, 95.7.19~53.9.26)・洪深 (劇作家・演出家, 94.12.31~55.8.29)・艾青^{かい} (詩人, 10.3.27~96.5.5)・馬寅初 (経済学者, 82.6.24~82.5.10)・馬思聰 (作曲家・提琴奏者^{バイオリスト}・音楽教育家, 12.5.7~87.5.20) である。

新政協議準備会常委会第 1 回会議 (6.16) で 6 つの小委員会が設置され、国家の表徴に關する上記諸問題を審議する第 6 小組は、馬叙倫 (中国民主促進会初代常務理事・首席代表 [翌年より初代主席], 建国時教育相) が組長、葉劍英 (北平 [9.27 北京に改称] 市軍管会主任兼市長) が副組長と成り、間も無く運営を仕切る副組長として沈雁氷が増補された。

成員は張奚若・田漢・馬寅初・郭沫若・李立三・陳嘉庚 (上記座談参加者) の他、鄭振鐸^{たく} (民促会発起人, 1898.12.19~1958.10.17)・蔡暢 (党中央委員・中華全国民主婦女連合会 [49.3.24 成立] 主席, 李富春夫人, 00.5.14~90.9.11)・張瀾 (民盟主席・建国時政府副主席, 72.4.2~55.2.9)・歐陽予倩 (劇作家/教育家, 89.5.12~62.9.21) が居り、前出の翦伯贊・錢三強・廖承志も一堂に集まった。

小組第 1 回会議 (7.4) の決定に由り、国旗・国章・国歌は準備会名義 (郭・沈・鄭起草, 周恩来決裁, 常委会批准) の募集要項で公募し (7.15~26 主要紙掲載, 8.20 締切), 国旗・国章案

選考委員会（葉〔招集〈世話〉人〕・廖・李・鄭・張奚若・蔡・田・翦＋非成員の専門家）、国歌詞・曲選考委員会（郭〔同〕・田・沈・錢・歐陽＋同）が審査する事と成った。

新政協議会第1次総会（9.21～30）は同小組の職務移行の形で、国旗・国歌・国章・国都・紀年案審査委員会を立ち上げた（委員55人、世話人＝馬叙倫）。翌日（23）からの討議（11分科会、代表6百人余）で、国旗応募作2992点（陳嘉庚も提出）中「復査」（2次審査）に残った38点を巡る評価が割れ、焦点の「復字1号/3号/4号/32号」の賛否両論が平行線を辿った。

上に大きい五星を飾る1番は左上に五星＋小さい五星4個の32番と同じ政権の特徴を表し、真ん中に黄河/黄河・長江を表す横棒1本/2本が有る4番/3番は、中国の特徴を表す。32番は1番より構図が魅力的で多くの支持を得、中共を象徴する大きい星の周りの4小星の寓意（労働者・農民・小資産階級・民族資産階級）への疑義も、最終的に採用を妨げなかった。

3・4番は南方に未征服地域が有るだけに、祖国統一の体現に成らないとの反対論が強い。張治中は4番を推す毛沢東に対して、国旗を二分する構図は国家分裂の観が有り、川に象れぬ棒は中国人の伝統的意識の中で「金箍棒」（如意棒。『西遊記』の孫悟空の武器）と為り、国旗の真ん中に置くのは場違いだと力説し、意表を突く指摘で重要性の認識と再考を促した。

後の毛の「9.25」発言中のこの件は、昔我々は国旗に中国の特徴を画こうと思ひ、故に1本を入れて黄河を代表したが、多くの国の国旗は必ずしも自国の特徴が有る訳ではなく、ソ連の斧（原著注＝正しくは鉄鎚）・鎌も別にソ連の特徴を代表しない；この意匠（復字32号）は革命・団結を表す（から宜しい）のだとし、満座の賛成を博した結論への張の貢献は出ない。

本文の最初の2頁の間は開国大典で原稿を読む毛の1頁分の写真で、同2・3頁目の間の同分量の写真は「9.25」座談記録の国歌関連部分である。馬叙倫が理想的な応募作が無い現状に鑑みて、『義勇軍進行（行進）曲』を暫定国歌にすると提案した処、歌詞中の「中華民族到了最後関頭（最後の瀬戸際に到った）」は不適切だと異論が出た（×××と記す発言者は不明）。

徐悲鴻等の賛同で「代国歌」が決り掛けた中で、張奚若・梁思成・黄炎培等の歌詞維持論が郭沫若・田漢等の部分修正論を凌ぎ、周恩来も無修正の方が情感を鼓動できると唱えた。毛の決断と全員の了解で決定に至り、座談会は斉唱を以て終了した。この抗日軍歌は平型関大捷12周年時に暫定国歌に選ばれ、林彪生誕75周年の前日（1982.12.4）に国歌に昇格した。

国歌の応募作694首には審査委員の郭沫若・馬叙倫・歐陽予倩や、馮至（詩人・学者、1905.9.17～93.2.22）・柯仲平（詩人、02.1.25～64.10.20）等の著名人の作も有ったが、田漢作詞・聶耳（作曲家、12.2.14～35.7.17）作曲の『義勇軍行進曲』には勝てない。映画『風雲儿女』の主題歌として創作・公開された1935年は、又「2035暗号」解説で重層的な意義を現す。

田は監獄で許幸之（画家・映画人、1904.4.5～91.12）監督の抗日映画の為に主題歌を作り、煙草入れの包装紙の裏に書いて接見を利用して同志に渡した。彼の紹介で入党した聶は組織の指示で日本へ避難する前に作曲を請け負ひ、東京到着後に書き上げ『進行曲』の題を付けた。

出資者の朱慶瀾（将軍・政治家・慈善家，1874～1941）に由り、「義勇軍」を冠する名と成った。

5月の新聞・雑誌掲載（10・16）と映画封切（24）で世に出た同曲の上演や音盤は、聶は水泳中の溺死（神奈川県藤沢市鶴沼海岸にて、7.17）の為に聞けなかった。聶より1年早く（1932）入党し1/3世紀生き延びた田は、中共治下で戯劇家協会主席・文化部戯曲改進局/戯曲芸術事業管理局局長等を務めた後、「文革」で失脚・獄死し『義勇軍行進曲』にも累が及んだ。

「12.12」訓示、「6.27」警告、「5.17」寛恕

彼の上記両選考委員会（国旗・国章案/国歌詞・曲）の唯一の兼任成員は、7年余り後「反右闘争」の標的に内定され周恩来・周揚の計らいで難を逃れたが、毛の文芸界「砲撃」（1963.12.12訓示、戯曲・美術・音楽・舞踏・映画・文学領域の社会主義改造は効果が薄く、多くの部門は「死人」に統治され、戯劇部門は特に問題が大きい、云々）の結果、更に7～8年後に批判・追放された。

康生・江青が仕切った全国現代劇観摩演出（実演見学）大会（1964.6.5～7.31）の閉幕式で、康は総括で唐突に京劇・昆曲各1作と映画4作を「大毒草」（極悪の有害作品）と断罪した。自作京劇『謝瑶環』（脚本執筆，1961）が矢面に立たされた田は議長席での坐り心地が悪くなり、以降は劇協党組（党の指導小組）書記解任等で会合・式典の議長席に着く事も無くなった。

一緒に非難された映画『北国江南』（1963）の脚本著者陽翰笙（作家，総理辦公室副主任・中国文学芸術界聯合会〔49.7.19成立〕党組書記歴任，02.11.2～93.6.7）と共に，第3期全人代（同年12.21開幕）の代表から除外され全国政協委員に降格された。対照的に江青は山東省代表として全人代入りし，満を持してスターリン生誕85周年（当時の認識）時から政治の表舞台に登った。

田は北京順義県に下放され（中央紅軍長征勝利30周年の翌日の1965.10.20）労働改造を強いられ，翌年1月『劇（脚）本』誌に元編集長の彼の『謝瑶環』を「大毒草」とする論説が発表され，『人民日報』『光明日報』（49.6.16民盟に由り創刊，53.1より諸民主党派・無党派民主人士共催，57年「反右」中より中共中央宣伝・統戦部指導）の転載（2.1・2）で，彼の打倒は確定された。

筆名「雲松」に見え隠れした江青の影は，「暮色蒼茫看勁松，乱雲飛渡仍從容」（暮色蒼茫たるなかに勁き松を看る，乱雲飛び渡れども仍從容）という，毛が1961年9月9日に彼女の為に詠んだ七（言）絶（句）『為李進同志題所攝廬山仙人洞照』（李進同志の為にその撮した廬山仙人洞の照に題す）の前半が傍証と成る（李進は本名李雲鶴・芸名藍蘋の江の「乳名」〔幼名〕）。

江は毛の文芸界糾弾（「12.12」訓示と翌1964年「6.27」訓示〔全国文聯と所属協会の修正主義化への警告〕）を受けて，「文革」前夜の2月2～20日に上海で軍総政治部責任者等と座談会を行った。毛は建国来の文芸界の反党・反社会主義路線を叩く紀要に何度も手を入れ，「江青同志召開的（招集し開催した）部隊文芸工作座談会」の名称に「林彪同志（の）委託（に由り）」を冠した。

毛は魯迅逝去1周年記念大会（1937.10.19，延安・陝北公学）で「聖人」の賛辞を使い，瞿

秋白と親しい彼の親共作家の他界は関心を寄せた中央紅軍長征の勝利1周年に当る。物故前の『徐懋庸に答え、併せて抗日統一戦線問題に就いて』（8.3～6）の「四条漢子」（4人の男）批判は、30年後に田漢・周揚・陽翰笙・夏衍（1900.10.30～95.2.6）への迫害に悪用された。

党を代表して上海文芸界を指導した4人は「国防文学」を謳う事で、魯迅の「民族革命戦争の大衆文学」の主張と衝突し、胡風を敵の回し者と見る処も魯の反感を買った。江青等は魯の神格化を利用して当時の左翼文学運動を否定し、「国防文学」を資産階級的な標語と断じ、提倡者の周と擁護者の田・陽・夏を誤った路線の追従者や敵の回し者・裏切り者とした。

皮肉な事に、魯が庇った胡は周の関与で逸早く「反革命集団」肅清で投獄され、「兩個口号」（2つの標語）論争で魯を擁護した馮雪峰（詩人・文学評論家、1903.6.2～76.1.31）も、中国作家協会副主席と成った後、54・55・57・58年の『文芸報』（機関紙）編集長解任、胡風事件関連の査問、「右派分子」認定、党籍剥奪を経て、「文革」中「叛徒」の冤罪を蒙った。

官製毛沢東伝に特記された1975年「5.17」指示は、賀誠（元軍事医学科学院院長、58年中将、01.11～92.11.8）の「無罪」を認め、過去の誣告を全て覆し職務を与える当しとした。賀は漢方医排除の偏頗に由る総後勤部衛生部副部長・衛生部次官解任（1953・55）、強制定年退職（63）を経て、68年に「外国に内通」と批判されたが、毛の恩赦で総後第1副部長に成った。

同じ衛生部次官・総後衛生部第1副部長を務めた傅連璋の事が脳裏を過って、彼は続いて賀の「幸存」（幸運な存命）と対照的な傅の「入土」（土に帰る）を悼み、「被^{ママ}迫」（“逼”の誤字）死」（迫害死）に対する「昭雪」（名誉回復）を命じた。「文革」発動9周年の翌日の意思表示は罪滅ぼしの意識が無かろうが、客観的には些少ながら道義の負債の償却と言えよう。

彼は建党54周年記念日の翌日（7.2）、林黙涵（元中宣部副部長・文化部次官、1913.1.10～2008.1.3）の手紙に、周揚の件は寛大に処理し仕事を割り当てるのが可かろう；病気が有れば治療の環境を提供しよう；長く監禁するのは得策ではない、と書いた。文芸政策の調整と知識人処遇の改善を重視するこの期に及んで、昔の肅清下手人の「文芸沙皇」を思い出した訳である。

毛は7月14日に江青・張春橋との面談で、重大な反革命行為が有る隠れた反革命分子でない限り、作家に対して「懲前毖後、治病救人」（前の失敗に懲りて後の戒めとし、病を治して人を救う）でなければ成らない；魯迅も多くの勢力に攻撃されたし、彼は生きていれば周揚等の長期監禁には賛成する筈が無い；兎角解任や監禁するのは神経衰弱の表現だ、と論じた。

胡風を「反革命分子」にして投獄した張本人の高説は、魯なら不賛成と承知で放置した実態を見ても説得力が弱い。彼は魯も中共政権に楯突くなら抑圧に変わりかねず、「反右」の初頭に上海で文芸界代表と懇談する際、魯が今生きているならどう成るかと言われ、羅稷南（学者・翻訳家、1898～1971.8.17）に訊かれて、監獄で書き続けるか一言も発しないだろうと答えた。

「5.3」是正、「5.2」「双百」、「10.16」「開火」（発砲）

毛は生前招集の最後の政治局会議（1975.5.3）で「文革」の行き過ぎを正す様に、教育・科学・文芸・報道・医務の各界の知識人は好い人も居ると述べた。7月初めに鄧小平との談話で、（革命的現代）模範劇は少な過ぎ、百花斉放は無くなり、僅かな過失も意見の表明も許されない、文章や劇を書くのが憚られ、小説も詩歌も無い、と時弊への憂慮を吐露した。

文芸活動の多様・自由・活発を表す「百花斉放」（種々の花が一斉に咲き揃う）は、毛が中国戯曲研究院の成立（1951.4.3）時に揮毫した祝辞に有る。政務院の『戯曲改革工作に関する指示』（5.5）は、全文（後半は「推陳出新」[古い物を取り除き、新しい物を作り出す]）を方針とし、京劇と地方演劇の主・（副）次関係の論争に対して、各種の戯曲形式の自由競争を奨励した。

中国歴史問題研究委員会の設立（中国文字改革研究委員会・中国語文〔国語〕教育研究委員会と共に、党中央 1953.8.5 批准）時、毛は中国の奴隷制と封建制の時代区分を巡る郭沫若と范文瀾（歴史家、1893～69.7.29）の見解の相違と学界の論争を念頭に、責任者の陳伯達に「百家争鳴」（多くの学者が自由に自説を発表し論争する）の運営方針を示した。

1956年2月、毛主席の会議で陸定一が学界の学術研究の現状と問題点を報告し、ある学派を持ち上げて別の学派を圧制する傾向に対して、科学の領域で「百家争鳴」の方針を実施する事が決った。陸中宣部長は後の政治局拡大会議（4.25～28）でも学術・芸術・技術的な問題の自由化を唱え（27）、最終日の「双百方針」の誕生に産婆の役割をした。

文化・科学に於ける「百花斉放」「百家争鳴」は先ず陳伯達が発言で提起し、毛は総括講話で芸術・技術分野の理想として肯定した。最高国務会議（5.2）で正式に宣言し、今や春が来たから大衆から生れた「百花斉放」が相応しいし、2千年前の春秋戦国の諸子百家の自由論争は我々も必要とする、という明快・闊達な主張は直ちに各界で熱烈な歓迎を受けた。

官製毛伝（建国後篇）第13章『《十大関係を論ず》から八大まで（上）』のこの件の前に、第3章『国民経済の回復の為に闘う』に映画『武訓伝』批判、第8章『過渡時期総路線（下）』に『紅樓夢』研究討論・胡適の資産階級唯心主義批判と胡風文芸思想批判・「反革命集団」摘発の経緯が詳記されるが、但し書きの反省から窺える様に何れも「百花斉放」には程遠い。

建国後初の思想・文化領域の批判運動で非難された『武訓伝』（脚本・監督＝孫瑜 [1900.3.21～90.7.1]、51年初封切）は、乞食芸人に身を糞^{やつ}蓄えた金で学校を建てた武訓（1838.12.5～96.4.23）の事績を描く。読み書きできない故に騙され虐^{しいた}げられた経歴から、貧しい子供に勉強の機会を恵^{めぐ}んで上げたい熱意は、名優趙丹（1915.6.27～80.10.10）の熱演と相俟^まって大反響を得た。

朱徳・周恩来等多数の要人は中南海での上映（1951.2.21）終了時に拍手で称えたが、朱が教示の意義を肯定した作品は、武力闘争に加わらぬ教育救国の宣揚として批判も生じた。毛は『人民日報』社説『映画《武訓伝》に関する討論を重視す当きである』（5.20）を執筆し、武の封建的文化への追求や統治階級への迎合、又その醜態を美談化する向きを強く諷した。

毛の指示で人民日報社・文化部の調査団が武の故郷（山東〔当時平原省〕堂邑県）を訪れ、『武訓歴史調査記』（『人民日報』7.23～28連載）で当人の搾取行為等を暴いた。マルクス主義の世界観・歴史観を植え付ける為の毛の攻撃は擁護論を撲滅したが、『毛伝』も認めた通り偏向・粗暴・過度な政治化の嫌いが有り、政治的批判で学術論争を解決する良からぬ先例を開いた。

『毛伝』第8章の核兵器開発の草創（1955.1.15書記処拡大会議）を記す3頁弱の次に、社会主義改造の全面的展開・深化の中で、学術・思想領域で再び資産階級思想への批判を指導した事が10頁強で綴られる。彼は自ら一家の言が有る『紅樓夢』の研究を巡る論争を切り口に、胡適（学者、元駐米大使・北京大学学長、1891.12.17～1962.2.24）批判へ持って行った。

「紅学」（『紅樓夢』研究）大家俞伯平（詩人、1900.1.8～90.10.15）の『紅樓夢簡論』（54.3）に対し、李希凡（中国人民大学哲学研究班在籍〔大学院生〕、27.12.11～2018.10.29）・藍翎（北京師範大学工農速成学校教員、31.7.3～05.2.8）は、論文で階級闘争の観点の欠落等を指摘し、『文芸報』への掲載可否の打診に回答が無い中で、『文史哲』（母校山東大学の紀要）9月号に発表した。

空中線役の江青（政務院文化部映画事業指導委員・中宣部映画処〔局・課間の部署〕処長）は毛に提供し、その意に沿って『人民日報』の転載を要請したが、鄧拓は婉曲に断り『文芸報』に引き受けさせた。毛は掲載（9月末）時の「編者按（評）」の両青年の未熟を印象付ける言い回しに怒り、『光明日報』の李・藍の別論文掲載（10.10）の「編者按」にも類似の不満を覚えた。

権威者に配慮し小人物を見下す馮雪峰編集長の態度も、俞や同じ「紅学」権威の胡（米国防定住）の非マルクス主義も容認できず、彼は10月16日に政治局成員と関連部門の責任者に長文の手紙を書き、『文芸報』『人民日報』の不支持や『武訓伝』批判後も旧態依然の資産階級の俘虜に甘んじる大人物を叩き、胡・俞の思想・方法への「開火」（発砲）の号令と成った。

馮は反省文（11.4『人民日報』）で「反マルクス＝レーニン主義の過誤」を認め、『文芸報』の編集体制は改組された（12.8、全国文聯・作協議長団合同胡適批判会決議）。党中央の『唯物主義思想を宣伝し資産階級唯心主義思想に反対する事に関する指示』（1955.3.1）が示す様に、毛は社会主義総路線の実施に伴って、資産階級と共に資産階級思想の消滅を真剣に目指した。

中央紅軍長征開始20周年の前日の「10.16」書簡は、「社会主義の新長征」も出だしがしくじり運命の信号である。『武訓伝』批判より酷い事に、毛の指弾も馮の謝罪も致命的な「反マルクス主義」で、参戦者は保身の為か苛烈な助勢をし、馮は解任され失脚・迫害が続き、長征を描く長篇小説『盧代之死』も書く資格が無いと告げられて、絶望の余り焼き棄てた。

『毛伝』は非マルクス主義の観点や党内の「小人物」圧制への批判を正当化しつつ、思想・学術の問題を短絡化する偏向や断罪が厳しい程好いとした過激で、マルクス主義に不賛成か余り賛成しないが、中共を擁護し新中国を熱愛する一部の知識人を傷付け、思想・文化工作に対する党の指導に相当の損害を与え、学術の繁栄と健全な発展にも不利だ、とする。

「10.24」批判, 「1.15」糾弾, 「1.20」裁決

胡適派・俞平伯への組織的批判の開始(中国作協古典文学部主催の『紅樓夢』研究問題討論会, 10.24)後, 陸定一は報告書で哲学・歴史学・教育学・言語学等の領域に於ける胡批判を進言し, 毛は当日(27)に許可し, 袁水拍(詩人, 1916~82.10.29)の『《文芸報》編者に質す』を添削し, 翌日の『人民日報』(袁は同紙文芸部副主任, 後中宣部文芸处处长)に掲載させた。

周揚は毛の意思を聞いて, 直ぐ『文芸報』糾弾の文聯・作協議長団合同拡大会議を開いた(31)。『人民日報』は馮雪峰の謝罪に追い討ちを掛け(黎之『《文芸報》編者は資産階級の作風スタイルを徹底的に反省すべきである』, 11.10), 毛はその批判文と『南方日報』(広東省委機関紙)転載(14)の馮の反省文に論評を書き, 自ら付けた火に次々と油を注ぐ形で執拗な非難を激化させた。

分野を表す「中共語」の「戦線」(「工業/文教～」等)は銃から生れた政権らしく戦闘的で, 毛の「思想戦線」の闘争も軍の「疲労を怖れず, 連続して戦う」伝統が染み込んでいた。俞平伯批判の展開から45日後(12.8)に胡適批判に重点が移り, 更に49日後(1955.1.26)の中宣部『胡風思想批判の展開に関する報告』で, 両胡(人・派)への並行攻撃が発動された。

胡風は左翼文化陣営の重要な一員として魯迅に評価されたが, 中共の文芸工作者との理論上の論争は建国後も続いた。1952年の文芸界整風で文芸思想が批判され, 周揚主宰の座談会(9~12月, 4回)で胡等は自己批判をした。翌年『文芸報』第2・3号(月2回刊)所載の林黙涵・何其芳(詩人・文学評論家, 1912.25~77.7.24)論文で, 胡への公開批判が始まった。

胡は『数年来の文芸の実践に関する報告』で習仲勳(政務院文教委員会主任)に手渡しし(7.22), 党中央宛の意見書(30万字)で林・何に反論し周揚が中心と為る宗派主義の統治を批判した。文聯・作協『文芸報』批判会で胡は周を攻撃し, 袁水拍・郭沫若・艾青の反駁・異論に遭った。周は「12.8」会議で毛許可の総括を行い, 胡の『文芸報』批判の方向性を誤りとした。

中国作協議長団は意見書の抜粋を公開する為に説明を書き, 毛の修正(1955.1.12)後の「胡風の資産階級文芸思想」は穏便な規定である。危険を察知した胡は周を訪ねて反省を行い, 公表を止めるか自分の声明を添付するよう求めた。毛は周・陸の拒否の建議(15日の報告書)を即日肯定し, 胡の文芸思想の性質を「反党反人民」に変え批判運動の基調を定めた。

中宣部「1.26」報告に対する毛の加筆(20)は, 社会主義建設・改造に反対し党の指導下の文芸運動を攻撃する等と断罪した。同月から文芸界で胡風文芸思想への批判が展開したが, 彼に近い舒燕(作家・編集者, 1922.7.2~2009.8.18)から40年代の胡の手紙を入手した事で, 毛は党内外の一部の作家を憎む言辞に激しく反応し, 政治的な集団抹殺に切り替えた。

彼は胡の『私の自己批判』と共に舒提供の資料を『人民日報』に公表させ(5.13), 『胡風反党(周揚案=小)集団に関する一部の資料』の題と痛撃・警告の「編者按」を付けた。同題の第2弾(23)に次ぐ第3弾(6.10)の「反革命集団」の改称と共に, 同日の社説(『胡風事件か

ら教訓を汲み取らなければ成らない』)の加筆で、隠れた反革命分子を暴き出すよう呼び掛けた。

『毛伝』は「胡風反革命集団」を建国後の思想・文化界の重大な冤罪とし、反革命肅清運動で一部の人に誤った処置をした事と同じく深刻な教訓が有ると振り返る。起因は毛の階級闘争の情勢や敵情を過大視する左傾的な情緒に帰着し、実情に合わない見立てから「肅反」で打撃の範囲が広過ぎて大勢の人を酷く傷付けたと締め括る。

11期3中全会後に完全な名誉回復に至ったとの記述は事実ながら粗略で、胡が無期懲役取消・釈放後の四川省政協委員当選(1979.4)時、65年判決への不服を中央に申し立てた結果、80年中央76号文書(9.29)は「反革命集団」の冤罪の名誉回復を決めたが、胡の「反共」経歴や文芸思想・宗派活動の誤りに言及した為、胡は受け入れず同意の署名を断った。

1985年4月、中央書記処批准の公安部文書(公二字50号)は80年中央決定中の歴史問題を取り消したが、全国政協委員等の名誉職を持つ胡の物故(6.8)後、遺族は不名誉な記述が残る当局の弔辞案に抗議して遺体を荼毘に付さず冷凍した。粘った末の追悼会(1986.1.15、八宝山革命公墓)で、文化相朱穆之(1916.12.25~2015.10.23)は弔詞で全面的な肯定を示した。

中宣部は1980年決定中の個人主義・宗派主義・唯心主義等の罪名を全て撤回す当く、中央辦公庁名義の『胡風同志の一層の名誉回復に関する補足通達』を起案したが、朱厚沢部長(1931.1~2010.5.9)が胡耀邦失脚の翌月(86.2)に更迭された所為で、胡逮捕の33年後、11期3中全会の9年半後に漸く徹底的な名誉回復が成された(政治局常委会許可,88.6.18下達)。

妥結の追悼会は毛が「反党反人民」と断罪した31年後に当り、毛の豹変は遵義会議開幕20周年時に巡り合せた。胡の上申書提出の「7.22」は中共「1大」開幕33周年の前日で、俞伯平・馮雪峰・胡風批判開始の「10.24」「11.14」「12.8」は、63年後の「19大」閉幕、48・58年後の「16・18大」閉幕、11年後の羅瑞卿解任決定会議開幕の日である。

私信の提供・論評で「小集団首領」を告発し毛に首肯された舒燕は、逸早く『長江日報』(武漢市委機関紙,1949.5.23創刊)に反省文(『初めから《延安文芸座談会に於ける講話》を学習する』,52.5.25)を掲げた。『人民日報』転載(6.8)時の「編者按」(胡喬木執筆)は、胡等の文芸思想の本質を資産階級・小資産階級の個人主義と捉えたが、彼の不義理で一大疑獄に発展した。

胡風逝去の「6.8」までの33年は逮捕→名誉完全回復の歳月に等しく、毛が講話を行った延安文芸工作者座談会(1942.5.2~23)の閉幕日は、7年後の『長江日報』の創刊日と24年後の「彭羅陸楊」書記処書記解任日である。開幕14周年の日には毛は「百家齊放、百花争鳴」を宣言し、「春が来た」の軽口で人々が雪融けを感激したのは長い厳寒の裏返しである。

(夏 剛, 立命館大学国際関係学部教授)

2021：变 ——百周年的再起 动 “红羊劫”的前奏曲？（2）

本部分追溯毛泽东时代的多次权力斗争和政界、军界、思想界、文化界整肃，指出苏共批判斯大林、试图赶超美国及对华施压、决裂，对毛发动“大跃进”、打倒彭德怀、提前还债具有根本性影响。

接着回顾“四个现代化”目标的形成、演变及国防科技发展最为迅速的进程，印证建国以来有增无减的强盛欲望和“枪杆子里出政权”的军事优先倾向。

进而聚焦 1958~61 年经济盲动冒进导致无数生灵涂炭的惨痛教训，剖析大轰大嗡、违背科学的“人民战争”作法和“好大喜功，急功近利，鄙视既往，迷信未来”的老毛病之积弊和流毒。

注目毛曾接受民主人士建议的国家主席连任不超过 2 届，并指示相应修改宪法一事，提及毛在主政前期亦不乏值得后人借鉴、继承的可圈点之处。

论及自然科学领域诺贝尔奖得主的日本 25 名对华人、中国人 8 名（其中本土仅 1 名），推断悬殊差距的根源之一在于毛泽东时代的轻视知识、打压知识分子。

由“文革”初期“红色恐怖”中周恩来保护民主人士、高级干部之举的部分收效和多半落空，审视伪“革命”暴乱的“红恶势力”猖獗到何其无法无天的地步。

（夏 刚，立命馆大学国际关系学院教授）